今や悲劇は益々其度を強めつゝ行く、幽閉せられた父頻婆娑羅王は『佛說未生寃經』によれば、

『食を絶たれ、窓から佛の所を拜む。故に之を塞ぎ其の足底を削る。』

今迄は王后によりて白粉のお團子を食ふことが出來たが、夫人が幽閉されてからは食を持つて來る者がない。王はたゞ窓から佛のみ所を拜むことが唯一の慰安であつた。誰も食を運んで呉れ手がない、其の自分の敵は誰か、自分の唯一人の愛子である。窓一つが力である。窓を通して釋尊の居られる耆闍崛山を拜す、其れが王の唯一の生活であつた。唯最後の據り所が佛のまします山を拜したといふ所に愍れにも亦妙味があると思ふ。是に偶像といふ事を考へなほさなければならぬ。人間は本當に具體的事實になると目で見るか、手でおさへるか即ち五官に訴へなければ滿足せぬ。此の際、王は苦みを訴へる場所があればよい譯である。今は只最後に唯一に釋尊の居られる山の姿を見るだけである。山は釋尊の御座所、否佛その者である。王はたゞ其れを拜した。自分の最愛の妻子、父母の寫眞を眞に或場合なつかしく見るといふ味である。寫眞を見ると一層よく其の時が思ひ出される。其處には所謂偶像といはれるものはないゝ、即ち生命其の者である。王はたゞ窓から耆舍崛山を拜して獄中に生き殘つた。阿闍世は其れを知つて門番をしてその窓を閉じしめた。もしや父昇りついて隙間から見てはならぬと其の足底を削らしめた。之は『佛說未生寃經』にも、『五分律』にも其の外傳說にも同樣であるから疑ひを入れぬ事實であると思ふ。隨分殘忍のことをしたものである。

西藏傳によると、阿闍世の子に腫物が出たので、王は可愛さの餘り自らその膿を吸ふてやつた。それを傍に見てゐた韋提希夫人が、おん身の父王もおん身の腫物をそのやうに吸はれた事があると申された。阿闍世は此言葉をきいて夢から醒めた如くに父王を念ふやうになつたといふ。こゝに深い眞理があるではないか。平生は親の恩は思はないが、子供を持つてみて子供がいふことを聞かぬ時に親の恩が泌々思はれる。子

供のことを思ふて親が思ひ出される。眞に子を見る時に親が生れる。不思議である。自分が本當に子供の愛を感ずる時に初めて親の愛が感せられる。多くの人は親の在る時には本當の親を持つてゐない。もとより生きて居るうちに親を生むこともあるが、多くは亡くなつて後に親が生れる。『子養はんと欲して親またず』とも古人は歎いた。阿闍世は母后の言葉をきいて驚いて『何人でもよいから幽閉して居る王の所へ行つて、まだ命があるといふ事を發見してきた者には、この國を與へても悔いることはない』と叫んだ。臣下は、我れ先きに牢屋へ駈けつけた。西藏傳の記者は、『足の爪を削られた王は、この騒がしい足音をきいて、今度は俺の命を取りに來たのだと思ふて、息絶えた』と書いてゐる。果して此の通りであつたか否かは誰も知る筈はないが、その時の事情でうまく想像したのであらう。

かくて遂に頻婆娑羅王は、自分の子によつて非業の最後をとげた。一方母の韋提希は幽閉せられて、そこで始めて救濟教の對機が開顯せられるに至つたのである。

救濟教の對機

斯ふいふ風な家庭悲劇は、自覺教の因緣果の道理で斯ふだと諦らめて片付けられるものではない。男子は巧みに概念をつくつて、その中にわかつた振りをして、『宗教とはこんなもの』位に片つけるから、自我の根源を壞すのが容易でないが、そこへゆくと婦人は男子よりも宗教的天分に富んでゐると思ふ。私は歐洲の教會でも婦人の參詣者の非常に多いのを見て、日本と同じだと感じたことであるが、男は浮薄で、智に囚はれ易く、自分全體を擲出すには下手であるが、婦人は內心如夜叉で利己主義の權化であつても、愈々こゝ一番といふ幕になると、絶對に自分を投げ出して仕舞ふ天分をもつてゐる。韋提希夫人が救濟教の對機となつたことは良に自然である。彼女は非常に偉大な役目を演じたものであるから、印度支那の高僧は一樣に韋提希夫人に鋭い觀察を拂ふことを忘れなかつた。あれだけ大きな役目をなした者は凡人ではないと支那の或る註釋者が言ひ出すと、一方ではイヤさうではない、彼は矢張り實の凡夫である

凡夫であるからあゝいふ風に頭の髪の毛をむしられて幽閉せられ、種々の災を受けなければならなかつたといふ者がある。それを又親鸞聖人は如來の救濟の上から再び彼女を大權の聖者と見られた。『觀經』の說示は如來の御方便の然らしむる所であると味はれた。

彌陀釋迦方便して、
阿難、目連、富樓那、韋提、
達多、闍王、頻婆娑羅、
耆婆、月光、行雨等、
大聖おのゝもろともに
凡愚底下のつみ人を
逆惡もらさぬ誓願に
方便引入せしめけり。

釋迦韋提方便して
淨土の緣熟すれば、
雨行大臣證として
闍王逆惡興せしむ。

釋尊や韋提が救濟の方便をめぐらし給ひて斯うした悲劇をつくつて吳れられたといふのである。之は又實に意味深い。即ち二千五百年程前に王舍城に起つた悲劇であるが、之が人類救濟の大事緣となり限りない人々を救ふべき運命を作つた。敎主は釋尊である。敎說は『觀經』であり、夫を受けた機は韋提希夫人である。三角形の一邊を受持つた人であるから、人類救濟のための大權の聖者である。權化方便を廻らし化身を現して我々の爲めに淨土敎を興して下されたのである。斯樣に韋提希夫人は三國の敎家に非常に問題になつた。

時に韋提希幽閉せられ已つて愁憂憔悴し、遙かに耆闍崛山に向ひ禮し奉り申し上げ

るやう、『如來世尊は前にはいつも阿難尊者をお遣はしになつて私を慰問して下されました。私は今愁ひ憂ふ、世尊は威儀重くましまして拜みまつる由もないが、何卒目連尊者阿難尊者を派遣して下され、私に會はせて下さい。』かく申し上げて悲しみの涙は雨のやうに流れた、遙かに佛を禮し奉り、未だ頭を擧げぬうちに、世尊は耆闍崛山に在して、韋提希の心の所念をお知りになり、即ち大目犍連と阿難に勅して空からしてお出でになつた。爾時、韋提希禮し畢つて頭を擧げ、世尊迦釋牟尼佛を見奉る。(七)

救濟教の舞臺

釋尊が空から神通力を以て飛來せられるとはどういふ事かと問ふ人があるかもしれぬが、これは空からでも何處からでも構はぬ、御身を自ら現して神通說法せられたので、兎に角、耆闍崛山の山の中から沒れて王宮に御出でになつた所が主眼である。此の文章を調べるといろ〳〵の問題がある。即ち救濟教と自覺教の舞臺の違ふ事が第一である。耆闍崛山の山の中は云はゞ大學の講堂である。其講堂で傳說による『法華經』を說かれて居つたといふ、七年間も續いて說かれて居つたといふ大學のレクチユアをお廢めになつて、愈々王宮においでになつた。悲劇の眞中へお入りになつた。今日で云ふならば新聞の三面記事どころでない、國家を轉覆へすやうな大騷ぎである。云はゞ自覺教を說かれた大學の講堂は人生の外なる理想鄉である。そこを『沒くれ』て城の中に飛び込まれたのは、家庭說教をなされたのである。家庭說教の動機は王宮の悲劇である。命懸けの說法である。聞く人も亦命懸けつた。『中外』で見たのであるが、前同志社大學の教授で日野眞澄氏は今から三四年程前に五人の子女を燒き殺された。同志社大學の學長問題の騷ぎのころであつたといふ。五人のお子さん達がどうしても忘れられないといふので、白い椿三本を男の子と女の子二人にかたどり五本の椿を庭に植えて紀念としたとかいてある。そして同氏の感想の中に『私が子供を失うた時に或る牧師の方がやつて來て、さうした受難も神樣のなしたまふ所と諦めらるがよいと云はれたが、仲々容易に諦められ

ものではない』といふやうに云うてをられた。五人の子供を焼き殺されては、東の間も忘れる事の出來ないのは人情の自然である。單に諦めよと云はれても諦められるものでない、又あつさりと諦めることは必ずしも宗教的ではあり得ない。但し左樣に勸告する人が人生の鐵火の間を經、悲みのどん底に入つた人格者であるならばその人のいふ言葉以外に不可思議の慰安があるに相違ないが氏に諦めよと勸めた人はさうした人格者でなかつたのであらう。即ち人生の苦痛のどん底へ沈んだ人の慰安者救濟者は、その救はれ手、苦痛の慰められ手、以上の苦惱を嘗めつゝも、而も一味の法味を味ふ人でなければならぬ。さういふやうな人格者が本氣になつて命懸けにかゝらなければ五人の子供を焼き殺した程の苦惱は、拂ひ去られるものでない。

愛の破綻

韋提希夫人は今こゝに彼女のもてるあらゆる愛の破綻を經驗した。夫は牢獄に捕はれ、子はその敵となり、今は憎み咀ふことさへも出來ない破目に陷つた、愛情の破綻した人になつて仕舞ふ。三界荒涼にして慰ふ所もなく、望みもない。長く外國にゐた人のよく經驗することであるが、自分の家族や友人がをらなければ、日本も戀しくないが、日本の國の戀しいのは神國だから戀しいのでない、自分に對して愛情を以つてゐるものが居るから日本が戀しいのである、愛者を思ふから愛者のをる國が戀しい懷しい。愛情のある所にこそ人間は住み得るのであつて、愛情のない所は沙漠に等しい。人は愛情に生きるものである。韋提希夫人には天下に二人の最大愛者があつた。その中の一人たる阿闍世太子は他の一人たる夫頻婆娑羅を殺した、そして自分迄も牢屋に入れられた。その憎むべき下手人は三千世界にたつた一人の我子である。もし阿闍世を除いた何人であつても、彼女は凡夫としての立場がある。それは憎み咀ふことが出來るからである。今は憎むことさへも出來ない狀態になつた。百方行き詰つてしまつた。さうなればもう釋尊に向つて『どうぞ世尊よ、私を救ふて下さい』といふより外はない。其の眞劍な、本當の意味の命がけの悲劇は同時に程度の多少はあれ何人も或

る時期に於いてぶつかるものである。かくの如き家庭生活の底を堀つてゆけば誰でももつてゐる所の悲痛を代表してかの韋提希夫人は救濟教を受けるべき對機になつたのである。さうした所の釋尊が自覺教の講堂からぬけ出で、王宮に降臨せられ、その熟したる根機に對して最大の福音を說かるゝに至つた。

女心をそのまゝに

『時に韋提希佛世尊を見奉り自ら瓔珞を絕ち身を擧げて地に投じ號泣して佛に向ふ。』天地のどこに向つても本當のつかまり所のないことを自覺した彼女は唯もう釋尊に御縋り申す外はない。女の嗜みも忘れ大地に仆れて泣いて釋尊に向ふた。本當に命懸けである。佛に白して言ふ『世尊よ、私はどうした罪の報ゐでこのやうな惡い子を生んだのでありませう。亦世尊はどういふ因緣で提婆達多と親身の關係があるのでありませう。』(八)

まことに此場合女のもてるあらゆる愚痴を代表して、釋尊に申上げた『なぜかうした惡い子をもつたのでせう』といふこと、次に最愛の子を欺した憎い提婆がどうして尊い世尊と血緣の緣きであらうといふ二つの最後の愚痴である。私の子も惡いか知れぬが、私の子を騙したのは尚ほわるい。進んで云へば惡い事をした子が惡いのではないので、騙したのが惡いといふ。子をかばふ母の盲愛である。どこまでも子を庇へ立てする淺間しい女の感情がかゝれてゐる。そして斯樣な眞劍な所に、却つてこの種の感情は貴賤を通じて表はれるのである。質問としては良に徹底した質問である。『何卒、世尊よ、私のために廣く憂惱なき所をお說き下さい。私はそこへ生れたうございます。閻浮提は濁つて惡に滿ちてゐます。私は最早居りたくありませぬ、どうか心配のない所、苦勞のない所を御知らせ下さい。私はそこへ行き度うございます。世の中は嫌になりました。』

この時世尊は光明を放ちて彼女に十方國土をお見せになつた。是等の國々を見了つて、夫人は

『世尊はこれらの諸佛の國土は皆清淨で光りに滿ちてゐますが、私は今、極樂世界の阿彌陀佛の所に生れたいと樂ひます、どうか世尊よ私に思惟を敎へて下さい、私に正しく受けることを敎へて下さい。』(九)

阿彌陀佛のみもとへ

此處に始めて救濟敎の說かれる因緣が出來上つた。即ち夫人が、私は世の中が嫌になりましたからよい所へやつて下さいといふ、眞劍な御願ひに對し、釋尊は色々樣々の世界を韋提にお見せになつた。お經を御覽になる時に注意せねばならないのは、總てが象徵的に書いてあるから、漠然として文句を讀めば、光を放つて十方を見せしめたとまるで活動寫眞を見せたやうにも取られるが、宗敎上の深い精神界の事柄である。からこんな風にするより外に道はない。口で言ふ場合にはかういつた方が判然する。十方の理想國を見せられたといふのは、平生韋提希夫人は釋尊からいろ〳〵の話を聞いて居つたが、さて牢屋へ入れられて、そこで釋尊に接して見ると成る程人間の最後の目的は佛のお救ひを受けるの外はないといふ事がわかつた。其の初めてわかつた心持ちを言ひ表はして見ると、釋尊のお光りによりて十方の理想國を見、あつちにもよい所があれば此方にもよい所がある。世の中には倫理、哲學、文學、藝術等樣々の理想鄕があるが、さういふ世界を皆んな捨てゝ如來の世界にゆく外はないと決着したことを表はしたのである。

一昨年私が外國から歸る時に、一所に歸つた人の中で長らく英米諸國に留學した科學者があつた。米國に居る時に自分の最愛の妻が惡瘡を病んで此の人は平生から家庭を愛しその爲めに土木科をやめて理科に轉じ敎師になつた程の人である。然るに船が新嘉坡に着くと妻君の死亡の通知に接した。三ケ年まちにまつた神戶埠頭の再會の望みは消え、まるで絕望のドン底に落ちた。それからといふものは、御飯を丁へるなり、毎日籐椅子にもたれて眼を閉じた。私はA君とともに佛法の話をした。君は一心に聞いたそして『聞いてゐる中は非常に心が落ちつく』と喜んだ。そして『だん〳〵

聞いて見ると如來を信ずる外はないといふことは解つたが、どうも如來を念じても妻に逢ふやうな強い感じがせぬ。どうか、さうした強い感じを與へて貰ひたい』と賴むを常とした。私はさう焦せらずに靜に讀書し冥想し聽聞するがよいと語つた。この人は科學者であるがよくいふには『僕等科學者が自然に對する時は嚴かなものだ、あの廣大な大空を見たまへ、決して單なる物質とは思へない。自然の幽遠廣大なること、人間の知識の果敢ないことが泌々感せられる。科學の知識を少しばかりもつ者が物質主義者になるので、專門家は却つて物質主義者にはなれない。俺はもう本當に信ずる外はない。君等の言ふ通りである』といふた。そして或時は『君等は宗教家であるからどうかしてもつと僕を有難がるやうにして呉れんか』などせがんだ。神戸へいつたら、どうか兩君の中、どちらかの宿へ泊めて呉れといふて、A君の宿へとまつた。その後數日、約束に從つて私は數部の信仰書を君に送つた。

十方世界あれもこれもよいが、どうか私に極樂へ行くことを教へて下さい—丁度この友の態度である。人間の行き詰つた最後に開けてくる自然の大道である。そこへ行くより、本當の道はないと知れた人に對して釋尊は愈々救濟教をお說きになつた。斯くて釋尊の出現がほんとうの意味をもつて來た。釋尊が八萬の法門を說かれた女性に對して『觀無量壽經』一部を御說きになつた。そしてこの一卷が大乘佛法流通の國々の限りない心靈を救濟したのである。

參考

(一) 調達視ㇾ之其族無量、還告ニ太子ニ未生冤ニ曰汝父登國來賓以貢ニ佛諸沙門ニ國藏空竭可ニ早圖ㇾ之ニ卽位爲ㇾ王吾當ㇾ爲ㇾ佛、兩得ニ其所ニ不ニ亦善ニ乎……

——北本涅槃第二十三——

(二) 阿闍名爲ニ不生ニ世者名ニ怨以ㇾ不ㇾ生ニ佛性ニ故卽煩惱之怨生云々

(三) 善見聞已卽與ニ大臣ニ收ニ其父王ニ閉ニ之城外ニ以ニ四種兵ニ而守ニ衛之ニ韋提夫人聞ニ是事ニ已卽至ニ王所ニ守ㇾ王人遮不ㇾ聽ㇾ入、爾時夫人生ニ瞋恚心ニ便呵ニ罵之ニ時諸守人卽告ニ太子ニ大王婦人欲ㇾ得ㇾ往ニ見父王ニ不審聽不、善見聞已復生ニ瞋嫌ニ卽往ニ母所ニ前牽ニ母髮ニ拔刀欲ㇾ斫、爾時耆婆白ニ言大王ニ、有國已來罪雖ニ極

重に不レ及ニ女人一況生所母、善見太子聞ニ是語一已爲ニ善愛一故卽便放捨遮ニ斷父王衣服飯食臥具湯藥一過ニ七日一已王命便終　——北本涅槃三十三——

(四) 爾時王舍大城有ニ一太子一名ニ阿闍世一隨ニ順調達ニ惡友之教一敬ニ執父王一頻婆娑羅一幽閉置ニ於七重室內一制ニ諸群臣一不レ得レ往、國大夫人名ニ韋提希一恭ニ敬大王一澡浴清淨以ニ酥蜜一和レ麨用塗ニ其身一諸瓔珞中盛蒲桃漿密以上レ王　——觀經——

(五) 后淨レ身澡浴以ニ密麨一塗レ身入見ニ大王一面顏憔悴不レ識ニ舉哀一聞レ之者莫レ不レ揮レ淚、后曰佛說榮樂無常罪苦有レ恒、王曰獄吏絕ニ餉食一飢渴日久身八萬戶々有ニ數百種蟲一噉ニ吾腹中一血肉消盡壽命且窮矣言レ之嗌咽息絕復連、……食を絕たれ窓より佛所を拜す、故に之を塞ぎ「削ニ其足底一」　——佛說未生冤經——

(六) 上出引文(三)を看よ

(七) 時韋提希被ニ幽閉一已愁憂憔悴遙向ニ耆闍崛山一爲レ佛作レ禮而作ニ是言一、如來世尊在昔之時、恒遣ニ阿難一來慰ニ問我一、我今愁憂、世尊威重無レ由レ得レ見願遣ニ目連尊者阿難一與レ我相見、作ニ是語一已悲泣雨淚遙向レ佛禮未舉レ頭頃

爾時世尊在ニ耆闍崛山一知ニ韋提希心之所念一卽勅ニ大目揵連一及以ニ阿難一從レ空而來、佛從ニ耆闍崛山一沒、於ニ王宮一出、時韋提希禮已舉レ頭見ニ世尊釋迦牟尼佛一

(八) 時韋提希見ニ佛世尊一自絕ニ瓔珞一擧レ身投レ地號泣向レ佛白言、世尊我宿何罪生ニ此惡子一世尊復有ニ何等因緣一與ニ提婆達多一共爲ニ眷屬一、唯願世尊爲レ我廣說ニ無憂惱處一我當往生不レ樂ニ閻浮提濁惡匹一也……世尊光明を放ちて十方國土を見せしむ

(九) 時韋提希白レ佛言世尊是諸佛土雖ニ復清淨皆有光明一我今樂レ生ニ極樂世界阿彌陀佛所一、唯願世尊教ニ我思惟一教ニ我正受一　——觀經——

(附) 韋提希夫人の年齡に就いて

「汝占ニ此諸夫人一、何者應レ生レ子。婆羅門占レ相言。此少壯夫人當レ生レ子。而是王怨」云々

——四分律第四——

第三講　救濟教の說示（上）

自覺教は吾々の生活を正しく齊整し、其所から自覺の光を引き出すといふのが主眼である。併し乍ら、あゝいふ王宮の悲劇の只中に捲き込まれた韋提希夫人のやうな狀態にありては到底生活を正しくし、坐禪觀法などして悟りを開くといふ事は出來るものでない。即ちさういふ狀態にあつては健康劑を服藥させるよりも直ちに起死回生の劇藥を注射するといふ事が必要で、それが即ち救濟教の說示である。

起死回生の藥

然らばどういふ藥をお說きになつたか、吾々の同じく聞かんとする所である。夫で此の際に於て釋尊の說かれたものは、自覺教の智と行、この行の中に戒と定がある。戒は道を修める爲めの方規即ち道德律で、それによつて禪定を修める。それは色々樣々の平生の慮りを息めて自分の心を凝らすものである。戒を修めて定を生む、戒を修めなければ正しい定は修められぬ。戒を修めて定を生じ定から眞實の智惠が出來て來る。之は自覺教に於ける健康劑である。それに對して救濟教に於て釋尊は信を說かれた。信は直觀を主とする。自分の生活を齊整して智惠を磨き出すに對して、釋尊は如來の救濟を信ずることを說かれたのである。

此の信といふものは自覺教の方では大層輕く取扱つてある。信は我々の一種の精神作用に過ぎない。信は淸淨の義である。信といふのは只淸らかといふ事である。我々澤山の精神活動の中の一つなる一心所である。單なる心の働きのうちのたゞ一つである。所が救濟教に行けば、此の信が一切である。信といふ一つの管を通じて佛の無限の力を得るのである。如來の電流が信の針金を通じて傳つて來るのである。今韋提希夫人は牢屋の中にありて釋尊が現はされる世界を見せてもらひ、自分は安樂世界の阿彌陀佛の許に生れたいと思ふ、即ち佛に救濟せられる外はない。どうしたら佛に救はれるか、それを聞かせて貰ひたいと願ふ。之に對して釋尊は觀經を說かれたのである

が。釋尊は『觀經』を說かれる前に既に『大無量壽經』をとかれた。病人の來る前に藥が出來上つてをつたやうなものである。

法藏苦薩の誓願

さて『大經』によると、非常に遠い昔に法藏といふ菩薩があつて一切衆生を救濟する四十八の大願を起し、最後の偈文を唱へて三の誓ひを概括した。(一)

『我超世の願を建つ、必ず無上道に至るであらう。斯の願ひが滿たされないならば誓つて正覺を得ないであらう。』

之は全體としての自分の願を述べたのである。

『我れ無量劫に於て大施主となり普く諸貧窮を濟はなければ誓つて正覺を得ないであらう。』

此中劫といふは劫波で長い時間の義である。これについて『阿含經』の中に二つの譬がある。一は四十里（六丁一里）平方の城の中に芥子粒を一杯いれる。そして三年に一度づゝ取り出して盡く無くなつた時が一劫であつてこれを芥子劫といふ。も一つは四十里立方の大石があつて三年に一度づゝ天人が羽衣で撫で、それによつて此石が消えてしまふのが一劫だとする。これを拂石劫と名ける。

然るに今これらの劫を量りなく集めた無量劫の間に諸々の貧しい者を濟ふといふ願がある。これは佛が大施主となるといふ誓願であるが、吾々は功德の力を持たないから、精神は非常に貧弱であらぬ方に求め、つまらぬ欲望を起し、外物に目を眩まされてゐる。功德のある人は心の腹がふくれてゐるから精神に慰安がある。佛はわれ〳〵の精神の常に貧しいことを見拔いておられるから、そういふ者のために大施主となつて普く諸の貧窮を救はねば佛にならぬと誓ひたまふ。第三は

『我れ佛道を成ずるに至つて名聲は十方に超え。どこ〳〵までも聞ゆる所なければ、誓つて正覺は得ぬであらう』と。どうかして自分の名前を普く十方に行きわたるやうに、云はゞ大いにプロパガンダをしたいとの願である。以上の內初の一は全體を總べ

括つたもの後の二はその內容である。卽ち佛のお誓ひの內容は何であるかといふと功德のないものには功德の寶をやるといふことである。併し其の內容があつても人が知らなければどうすることも出來ないから知らせるといふ事が第二の要件である。總ての問題に之があると思ふ。何故かといふと內容を天下の人に知らせるために廣告をする新聞で出す、盛んに宣傳をやるのと同じで、此の佛の超世の願世に超えた願は斯ういふ內容をもつたものであるといふ事を十方の人に廣く知らせるのである。願は或は誓願といふ。單なる願望でも希望でもない。誓願である。

智惠と慈悲と誓ひ

卽ち我々の精神全體が活躍して一つの方向に向つて集注する時に誓願となる。親の子を思ふことに就いて云へば可愛いといふのは慈悲、心身ともにまちがひのないやうに育てるは智惠であるが、智惠と慈悲丈では親心は言ひ盡して居らぬ。それに對して誓がある。どうしても此の子供を立派に育て上げなければおかぬといふ親の決心である。卽ち慈悲と智惠の二つが一緒に燃え上つて同じ方向に向つて突進するのが誓である。それで智情意に分ければ誓願は意志である。慈悲智惠が一緒になつて意志力になつて現れたのが誓願である。佛には無限の慈悲があり智惠があるといはれて居るが、智惠慈悲の人が本當に人間に向つて活躍して來る所が卽ち誓願となる。斯ういふ救濟主があるといふ事を釋尊は旣に王舍城の悲劇以前に云はゞ大學の講堂たる耆闍崛山で旣に說かれたのである。けれども其の藥を正しく飮む者がなかつたが、今や始めて韋提希夫人が『世尊よ私は阿彌陀佛の極樂世界に生れたいと樂ひます』といふ事を申したので今いふ佛の誓願が之に向つて注がれたのである。本願から申せば、此の佛の本願に喚び覺まされたといふべきである。天地宇宙の道である大慈悲大智惠が大いなる活動的意志となつて現れて、何かそこに機緣があつたならば直ちにそれに集中する。不斷に活躍して居る大意志が今や韋提希夫人に向つて專ら注がれて來たのである。であるから韋提希夫人が佛の所に生れたいと自らいつたのは、此の大誓願の力によつて

啓發され、眞に絶對界を戀ふる心となつたのである。之は斯ういふ狀態にある時に其所へ行くより外には道がなくなつて來る。其れに對して釋尊は正しく藥をお與へになる時には『大經』を再び繰り返されたかといふと、さうではない。

『汝知らずや、阿彌陀佛此を去り給ふこと遠からず』(二)

牢屋の中に苦んで誰れも慰めて呉れ手のない韋提希夫人に對して阿彌陀佛此處を去り給ふ事遠からず、極樂淨土は遠い所ではない。此處に淨土があると積極的に言はないで釋尊は此を去る事遠からず、報の淨土は此處を去ること遠くはない近いのである と仰せられた。現實の痛みに苦んでゐる彼女に眞の理想と希望といふものは遠い所にあるのではない。いかな狀態にあつても、現在脚下に達せらるべきものである。と宣給ふ。牢獄でも金殿玉樓でも何處でもかまはぬ、首をめぐらせば、そこに理想鄕がある。理想が實現する。其れから三福を說かれ、其の中に一番大事なものは菩提心を發し深く因果を信ずる、之は一番大事な事である。

菩提心を發すこと

菩提心とは Bodhi 覺、若しくば道と譯す。菩提心といふ事は覺心若しくば道心である。道心丈では一寸足らぬから原語を擧げて菩提といつたのである。即ち一つの大きな理想を持つといふ事である。宗教を知らない人は眞の理想を持たない。即ち科學的な物質的な考へを以つて居る人にとつては、人生は誠に情けないもので、人間は生れて三十年五十年で死ぬ。云はゞ地球の黴のやうな、蛆のやうなものが僅かの間只生きて居る丈である。而も此の身體は洵に弱いもので病氣に罹る。口にはさういつて居ないが心の中には皆さう思うて居る。金とか名譽とか安價な快樂論者になつてものはなくて卑近な欲望をのみ持つて居る。道心を發すといふは吾は決して死ぬものではない積極的に無限の壽命即ち無限の命をもつて無限の智惠をもつことの出來るものであるといふ大いなる欲望—希望をもつたものである。之がなければ宗教といふものへは入り得な

い之を裏からいへば特にさういふ事を頭の中に思うて居らぬとしても人生の悲慘に苦むと之を脫け出て眞の理想鄕に出きたいといふ希望を生ずる。裏をかへせば、菩提心が入つてゐるので、それが卽ち道心である。自己を大地に投げ出して大なる理想を願求するのが菩提心で、之を發すのは非常に大事であつて、之のないものは到底宗敎の人になる事は出來ない。今日滔々として世界の多くの人が宗敎に入る事が出來ないのは道心を發す事が出來ないからである。是まで人間の考へた科學の智識を基として飛行機を發明したり電信電氣を發明したりして、それに眼が眩み、其處に計らずも物質的の考が起きて大理想を起す事が出來なくなつた。だから眞の人間生活の第一步は大菩提心を發すことである。

釋尊は韋提希夫人に向つて『お前は決して獄中に在つて、因果の大いなる車のもとに押し潰される一匹の虫のやうに思つてはならぬ。大菩提心を發す事が出來る、決して落膽するには及ばない。大いなる理想を願求する考をお前は持つてゐる。阿彌陀佛

此を去る事遠からず、久遠の親の大理想は現前牢獄中のお前から遠いのではない。卽ちそこで菩提心を發すことが出來る。

次に深信因果とは、深く因果を信ずることで之が又非常に重要である。今日多くの人々が皆正しき道を步み得ないのは深信因果といふ事を看過したからである。私は日本の佛敎が日本の民族に影響した重なる點が凡そ二つあると思ふ。一つは事物に對して『勿體ない』といふ事と、もう一つは『深信因果』三世因果の道理を信ずることである。此の二つによつて日本の佛敎は日本の民族の心の深い奧底に觸れて居ると思ふ。

日本文化の基調

事物に對して勿體ないといふ考は之は此の經文に基けば發菩提心である。嘗つて禪家の大德が、小僧が手水鉢の水を大地に飜すと『さういふ所へ飜しては勿體ない、草木にかければそれが草木の食物になるではないか。一杯の水でも粗末にしてはならない』といはれた。一杯の水に對して勿體ないといふ考が起れば水に向つて無限の價を

見て居るのである。即ち大理想を認めて居るのである。私なぞも子供の時御飯を饒して叱られた『勿體ない、一粒の米が出來るには百姓が春から秋へかけて一生懸命に働かねばならぬ、勿體ない。』味噌汁が味ないつては『勿體ない罰が當る』といつて叱られた。事物に對して大理想を以つて居る、事物に對して大理想を以つて居るといふ事は事物に無限の價値を認めてゐる。人間社會としては水一杯は何でもない事である。それを勿體ない事である、粗末にしてはならないといふのは水に對して佛性を認めてゐる——人間社會で計算して正札をつければ何でもない。蓮如上人は紙片をおし戴いて佛物である粗末にしてはならないといはれた。一枚の紙片を戴くといふ事には發菩提心の精神が湧いてゐる。道心を以つて事物を見ると此の事物は皆んな力をもつて來る。無限の價値をもつて來る。只今日は總ての物は製造して人間の共通したものが、それで以つて幾らだ〳〵と符牒をつけて行くやうになつて來た。一番しまひには五十圓百圓の月給取りといふ風に人間に五十圓百圓の符牒をつけるやうになつた。是が即ち道心を失つた證據で、大理想を建設する事が出來ないのであるといふ事が明治大正にかけて半世紀間、日本は、世界中の惡い思想を集めて此勿體ないといふ大思想を忘れた。敎育の善美は得て望むべからざるものである。それから次の因果を信ずるといふ事である。原因結果の道理は物質界丈でなく精神上にも行き亘つてゐる。心の中に惡い事をすれば即ち人を怨めばその怨むといふ汚れた心で自分の心は先づ汚されてしまふ。又物を盜りたいといふ心が起きれば此の心は泥棒である。腹を立てれば赤鬼になつてゐる。精神にさういふ欲が起れば其の精神の結果を見るに違ひない。因果を信ずるといふ事は吾々が生活を過去現在未來と此の三世の因果を信ずる。今日の現在は過去から來た、未來は此の現在が產んで行く。今惡い事をすれば、此の世か後の世に現在の果を生む。德川時代の人は因果を信じて居つたから、たとへ惰死をするにしても一蓮托生と美しい希望があつた。けれども此の頃の惰死はたゞ猫いらずを以つて死んでしまふ丈である。三世の因果を信ずる時に我々の生活は決して現在丈の生

活ではない、無限の過去を以つて居ると同時に無限の未來を以つてゐる。昔、西洋の或る文學者が言つた有名な言葉がある、燕が一羽向ふの窓から此の窓をぬけて出た、それを見て不圖思ふには、我々の生活も燕の之と同じだ、吾々の現在の五十年は僅かなやうであるが、無限の空間がある。現在の三十年五十年といふ事も、スウッと燕が來て室をスウッと通つて行つたやうなものである。其の前後には無限の過去と無限の將來を永遠に持つてゐる。深信因果は非常に大きなものを持つてゐる。五十年で死んで仕舞ふと思へばこそ情けないが無限の過去から現在を通つて未來へ貫いて行く大きなものである。數學も代數では一(マイナス)の數を取り扱ふ十(プラス)の數と同樣にマイナスの數がある。即ち二倍の數となる。此のプラスとマイナスもあつちこつちへ關係をつけると算術で解し得ない答へが容易にでゝくる。現在は現在丈で解決されるものではない、無限の過去と無限の未來をもつときに現在は淨化される。無限の過去、無限の未來の爲めに、場合によりては現在を弊屣の如く捨てる事が出來る。私は勿體ないといふ考と三世因果の道理を信ずる。此の二つの考が日本の文化の基調をなしてゐると思ふ。之は淨瑠璃、謠曲其他日本の文學を見れば直ちにわかる、源氏物語を始め日本文學の代表的のものを見れば此の二つが緯になり經になつて日本文化の機を織りなして居ることが知れる。夫が明治の物質的敎育によりて大理想を建設する基礎をなしてゐる偉大な思想を失ひつゝあると思ふ。釋尊が韋提希夫人に對して、本當の信仰を獲得する前に發菩提心と、深信因果を、獄中に說かれた事は非常に意味が深いと思ふのである。

其の次に

『如來今韋提希及び未來世の一切衆生をして西方極樂世界を觀せしめ、佛の力による が故に彼の淸淨の國土を見る事が出來る。明鏡を執つて自らの面像を見るやうに、彼の國土の極妙なる樂事を見て心に歡喜ぶが故に時に應じて即ち無生法忍を得』(三)

如より來生す

如來といふのは釋尊自らを如來と謂はれた、如來といふ言葉は Tatha gatha (多陀

阿伽度）是くの如く來る、即ち Thus come。是の如く來るといふ事は『來るべきやうに來る』で、支那では『如より來生す』と譯した。如といふのは如〳〵是といふので如には色々の意味がありますが如は即ち眞如、佛は眞如から來た、眞如から來るといふのは如是來るのである、間違なく眞實に來るの意味である。Tatha は間違なく疑なく眞如の通り來る。夫はどういふ事かといふと、如來といふ事が眞如から來生したものであるから眞如其の物である。即ち眞實者である。私は眞實者と譯すのが如來の意義に近いと思ふ。人生は多くまことでないのである。我々は始終虛僞である、まことがないのである。佛は眞實のお方である。それであるから『如來今や韋提のみならず末世の一切衆生を救はんが爲に西方極樂世界を觀せしむるに、佛の力によるが故に』といふ中の『以佛力故』の四文字は注意すべき文字である。茲に他力が出てゐる。佛力他力によりて當に彼の淸淨なる國土を見る事を得、淸淨なる鏡を以つて顏を見る如し極妙樂事を見る事が出來る。その時に心大に喜ぶ、そしてその時と同時に我々は無生法忍を得

のである。大變六ケしい事になつて來たが、無生法忍は Anu utpattika dhama kshānti 之は無生の承認を得る。生ずるからして迷がある、生じないといふ信認を得る、之が最後である、今度は我々が受けた迷の生が盡きるから無生である、無生の法の忍、忍といふのは一體、忍耐といふ字である。忍ぶといふ字であるが、眞の忍びうるのは、法の相を實の如くに認識するからであるといふので今の場合は認可決定の義である。もう早、決して生じない即ち迷の道は盡きてしまつたといふ、さうした法を認可決定したものである。信仰を獲ると斯ういふ一つの認識を得る、無生法忍といふ結果を得る。之は仲々八釜しい事で『華嚴經』等の大乘經典にはいろ〳〵と說かれてある。三忍とは音響忍、柔順忍、無生法忍の三で、音響忍といふのは音を聞く時一つの認識を得る。柔順忍と言ふは事物に順應するなだらかな心をいふ。私は聞法といふ事は難かしい事と思ふ、眞に柔順して聞く事は中々出來ない。第三無生法忍とは信心を得る、極樂の樂しい所を見て心が喜ぶ、心が喜んだ時我々はかういふ一つの認可決定を得

る。こゝに一寸疑はれるのは、西方極樂世界を觀ずると佛の力によつて鏡で自分の顏を見るやうに極樂世界が見える、さうして俺があそこに行くといつて喜ぶ、喜ぶうちに無生法忍を得る。何んだか受取り難いと思はれる。併し是は心の上のことを象徵的にかいたもので、望遠鏡か何かによつて物を見るやうになるのではない。總て斯ういふ經典を見る時には注意を要するので、見えるといふから極樂世界が此の目で見えるやうに思はれたら間違ひである。信仰上の事は幽徵にして表現し得られないから、目に寄托して說くか、耳に準へて說くか、何れ五感の對照に準へて精神上の神秘の世界を說くより外には道がない。音樂として表現してよい場合には音樂として、聲として表現する事である。此の場合は極樂といふ理想の世界を目で見る、目に準つて信仰上の神秘を出したのである。

『佛韋提希に告げたまはく。汝は凡夫で心想羸劣り、未だ天眼を得て居らないから遠く觀ることが出來ない。如來に異の方便があつておん身をして見奉ることが出來るやうにして下さる』(四)

と說かれた。之も目に準らへ、天眼を持つてゐないから見る事が出來ない、信仰生活の何たるかを見る事が出來ない。此中『心想羸劣』は注意すべきものである。我々の精神は情けないもので、話を聞いて合點する丈で眞に心に徹到しない。本當に到りとゞかないのは畢竟法の教を受取る準備が出來て居ないからである。故に如來の方から色々手段を廻らして受けられるやうにして下さる其の次は正しく神秘的表現となる。

佛力によりて佛を見る

『佛當に汝の爲に苦惱を除くの法を說きのべるであらう。是の語を說く時に無量壽佛空中に住立したまふ』觀世音、大勢至の二大士左右に侍り、光明熾んにして具に見奉ることは出來ぬ。百千の閻浮檀金色も比べられぬ。

『時に韋提希、無量壽佛を見奉ること已つて、足に接して禮し奉る。佛に申し上ぐ

るやう、世尊よ、私は今、佛のみ力によりて無量壽佛を見奉ることが出來ました』(五)

何とも奇異な文字で捉へ所がない。愈此處一番となると、いつもかうした文字に接するのはどういふ譯かと云へば之もやつぱり信仰上の事は味と同じであつて、密柑を食べないものに密柑の味をいくら講釋してもわからぬ。黄色いものだといふと黄粉のやうなものかといふし、酸いものだといふと酢のやうなものか、甘いものだといふと砂糖のやうなものか、砂糖と酢を交せたやうなものかといふ。結局密柑を食はぬものには密柑の味はわからぬ。釋尊も『百千萬劫かゝつても窮め盡すことは出來ぬ』と仰やつたのは知らぬ者に說くから說けない、知つて居る人には說く必要がない。だから我成佛已來一字も說かぬと謂はれた。因果を信じなければならぬ、大理想を建設しなければならぬ。お前は心想羸劣で駄目であるから、佛の力に因つて佛國を見る事が出來ると說敎が高潮に達した時に、體顯の世界が表はれる。之は何とも表せないから、是の語を說き給ふ時『無量壽佛空中に住立し給ふ』となる。之より確なものがあらうか。如來が出て下さるならば信じられるといふ人もあるが、只吾々の眼で見る佛は化身か魔佛であつて眞佛でない。今の韋提希夫人の見られた佛は單にこの眼で見た佛でない、何とも此の確かさは口に言ふことが出來ないので住立空中に依つて表はしたのである。併し單に夫れ丈ではわからぬから、其の次に正しく信ずるといふ事はどんな風になる事か、それを說かれてある。一體此のお經は觀無量壽經と名けるので即ち無量壽を觀ずるお經である。限りのない命の佛を觀ずる。さういふお經であるから、佛が空中にお立ちになつたといふ事に就て佛が目の前にお立ちになつた相を見たのである。たゞ眼丈に訴へるやうに考へてはいかんから其の後に『佛の身を觀るを以つての故に亦佛の心を見奉る』佛の身を觀奉るといふ事は佛の心を見奉ることである我々は木像や繪像を見てゐるが眞に佛の身を見るは佛心を見るのであつて『佛心とは大慈悲でである。無緣の慈悲を以つて諸々の衆生を攝す』(六)

佛心とは大慈悲

救濟教主世尊

緣なき衆生は度し難しといふが此の無緣の慈といふのは、限りない因緣を以つて即ち有りと有らゆる因緣を以つて諸々の衆生を攝する、支那の曇鸞大師は佛身は無相の故に相ならざるはなしと云はれた。同じ行き方である。相がないといふ事は總ての相に普しといふ事、例へば此の虛空には何もない、何もないから何物でも容れる、何かあれば容れる事は出來ない、ないから容れるといふ事である。無緣もさうである。緣がないといふ事はあらゆる緣を攝める。斯ういふ修辭法は佛敎にはたくさんにある。佛敎で無學といふのは學問をするものがない、學問し盡してしまつた事である。馬鹿のことも無學といふがいつも兩極端は一致すると見える。ありとあらゆる緣を以つて衆生を攝めて居るところに、正しく佛心の定義をつけられたのである。佛といふ事はどういふ事か、限りないお慈悲である。

あはれみを物に施す心より
外に佛の心やはある

といふ歌があるが夫と同じで、此に初めて佛といふ意義が明らかになつて來た。

是心作佛是心是佛

問曰　觀無量壽經言『諸佛如來是法界身入二一切衆生心想中一是故汝等心想レ佛時定心即是三十二相八十隨形好是心作佛是心是佛諸佛正徧知海從二心想一生』是義如何。

答曰　是身不レ行二他緣一是故入二一切衆生心想中一『心想レ佛時是心即是三十二相八十隨形好』者當二衆生心想レ佛時一佛身相好顯二現衆生心中一也譬如二水清則色像現一水之與レ像不レ一不レ異故言二佛相好身即是心想一也是心即是心想一也是心作佛者言心能作レ佛也是心是佛者心外無レ佛譬如レ火從レ木出火不レ得レ離レ木也以レ不レ離レ木故則能燒レ木木爲レ火燒木即爲レ火也諸佛正徧知海從二心想一生者正徧知者眞正如二法界一而知也法界無想故諸佛無知也以二無知一故無レ不レ知也無知而知者是正徧知也是知深廣不レ可二測量一故譬レ海也（曇鸞大師著淨土論註上、二十二丁）

問ふて曰く觀無量壽經に言ふ諸佛如來は是れ法界身なり、佛樣といふのは法界の身體である。全法界に充滿てゐらせられる。一切衆生の心想の中に入り給ふ。是の故に汝等心に佛を想ふ時是の心即ち三十二相八十隨形好なり。是の心佛となる、是の心是れ佛なり。諸佛の正しく徧き智惠の海は心想からして生れるのである。是の義如何——どういふ意味合であるか答へて曰く……是の身他緣を行せず——他の法の緣を認めない外の所へ行かない、是の故に一切衆生の心想の中に入り給ふ。それであるから心に佛を想ふ時にその心は即ち是れ三十二相八十隨形好といふのはどういふ譯であるかといふと、衆生が心に佛を想ふて居つた時に當つて、佛身の相好が衆生の心の中に現れて下さる。水清ければ則ち色緣現ずるが如し。水と像と一ならず異ならず。今映す水と映つた像と一つでもない、二つでもない二つかといへば一つである、同じものかと云へば異ふ、一つでもないし二つでもない、別かといへば別でもない。此の故に佛の相好身が即ち是れ心想と言ふのである。佛の身體が即ち心である。我々の心と

一つかといへば一つではない。異つて居るかといへば異つても居ない。是心作佛といふのは斯ういふ意味に於て心がよく佛になるといふ事である。是の心即ち佛とは心の外に佛はないといふこと。譬へば火が木より出でゝ火、木を離るゝ事を得ず、木を離れざるを以ての故に則ち能く木を燒く。木が火の爲に燒かれて即ち火となるやうなものである。印度の深山なぞで大木が生えてゐるところへ大風が吹いて來ると、その大木が互に擦れ合うて火が起り山火事が起る。即ち火が木から出て、其の火が木を離れないから木が火の爲に燒かれて即ち火になるやうに、佛が心の中には入つて下さるのも此の道理である。『諸佛の正徧智海は心想より生ず』といふのは『正徧智』とは、正は眞正といふ意味である。一切法界何もわからぬものはない。法界には想ひがない、あゝのかうのといふ分別がない。虛空のやうに洋々たる智慧である。さうした智慧でなければ一切法界に行き亘ることは出來ぬだから夫は無智である。無智であるから知らざるものはない。私等の知るといふ事は知らぬといふ事である。總てを知り盡して

をらぬから、知るといふ事は知らぬと意味す。金を持つて居るといふ反面は金を持たぬといふ事になる。即ち或る一部分の物を持つてゐるといふ事であるから、持つて居るといふ事を論理的に考へれば持つて居ない事になる。從つて凡をもつてゐるとは所詮所有してをらぬことゝなる。無知といふ事は我々が知つて居るやうなこんな小さい事柄でないから無知の故に知らざるなきといふ。無知にして而も知るは是れ正徧知なり、正しく徧く知るといふ事であつて全法界に亘つて知るものであるから正徧知である。是の知惠が深廣にして測量する事が出來ないから海に譬へたのである。此の文は恐らく信仰といふものを言葉を以つて說いたものとしては全世界に稀な文だと思ふ。我々が佛を信ずるといふ事はどういふ事であるかといふと、佛は法界身であるから一切世界に充ち滿ちて居て下さる。それであるからどこへ入るかといふと一切衆生の心の中に入つて下さる。即ち悟りの佛がどの方からでも心の中には入つて下さる。諸佛の正徧智海は心想より生ず、心から生れる、前の方には如來が入つて下さる、後の方には佛が心から生れ出て下さる。これで盡して居ると思ふ。信ずるといふ內容を觀ると、一つには佛が私の中へ入つて下さる。一つには佛が心より生れ出て下さる。大凡我々の思想形式から云へば此の二つより外には云へない。第一の方面から云へば佛は客觀的であり、第二の方からは主觀的である。佛が外から私の心には入つて下さるといふ考へ方からいへば、私の歸依し奉る佛である。丁度子供が親の所へ行くやうに、親としての佛である。全法界に充ち滿ちて心の中には入つて下さる、歸依信賴の對象となつて下さる佛である。又如來は私の心から生れて下さる。さうすると私自らが親のやうになつて居る。子供の私が親の佛を生む。如來はどこから出て下さるか心の中から生れて下さる。思想の形式から謂へば內外、主觀客觀の二つより外に說明が出來ないけれども、之は一つである。外と內と兩方たゝんで釘打つて下さるといふ心持ちである。さうして殊に譬へが面白い。水の中に影が映る、山なら山の影が映る。之は水であり影であるが。影が映つた場合は水と山が一つか、一つでないか。そは水と山は一

つではない、山の影と水は一つでない。そんなら違つたものかといへば水の中に山の影が映つて居るから異つたものでもない。一ならず異ならず。思想の形式から謂へば二つといはれる。佛心は我々の心であつて佛と私は一つかといへば一つではない、全然同じとは云はれぬ。異つてゐるかといふに此の如來は私の心を離れての如來でない。私の心を離れて佛はあり得ないから心の外には佛は在さない。

私一人の佛

信仰の天地には私の外に佛はない。皆さんには皆さんおひとりの佛である。私の心を離れては存在しない。私一人の佛である。皆さんには皆さんおひとり一切衆生を助けなければ佛にならない。私なら私一人を助けなければ佛にならない。佛は一ならず異ならず、實にもう信念といふものを表現するに於て是より偉きな文字はないと思ふ。私が初めて佛を信ずるといふ事になつたのは此の文に依つて啓發されたのであつた。中學に居つた時分信仰問題に悶へて、佛を信ずるといふ事はどういふ事であるか、どういふ事が信念か見當がつかない。お念佛を稱へたらどうなるか薩張りわからぬ。どこから喰ひ込んでよいか取りつく場所がない。其の時に私はよく中學の講堂でお勤めをして居て多勢の人が立つて食堂へ行つた後で自分は一人殘つてお念佛を申して居つた。不圖、氣が附いて見ると一秒間か一分間か知らんが、其の時自分の精神は洋々として清らかになつて居る。私は驚いた、斯ういふ事は今迄一ぺんも經驗した事がない。自分はさういふ事にならうと思つてなつたのではないが、其の時偶然禮拜して居つた時淨らかに澄み亘つて別な精神生活になつて居つた。其の時に此の文を思ひ出したのである。成る程佛樣は心の中に入つて下さるといふ事は此の事である。如來が心の中に入つて下さるといふ事は湧き出て下さる事である。或は又他の言葉でいへば心に疑のない時、心が虛になつた時煩惱妄念の影を隱した時に佛は入つて下さる湧き出て下さる。信仰は是である。自分の精神の中にカチンと一つ觸れる者がある。之はもう明かな事柄であつて疑ふ事が出來ない。さういふ經驗を私を持つて居

るから、此の文はどうしても忘れられない。多くの人は如來はわからぬ。若し佛が現れて之が佛であるといふならば自分は信ずるといふ。老人の人達はいふ、佛のいますことは疑ひない。有るに違ひない。けれどもその佛が自分を助けて下さるかどうかゞ問題であるといふ。所が若い人はさうは言はぬ。佛の存在がわかれば信ずる事が出來るが、わからぬから信ずる事は出來ない。之は兩方とも間違つてゐる。

獲信の機會

佛を信ずるといふ事はどういふ事かといふと、我々が佛法の事を聞いて居る時に、何等かの機會によつて、この不可思議の心靈上の經驗をうるのである。或る人は考を明瞭にして遂に信ずるやうになり、又は何んでもないやうな尋常茶飯の出來事からヒヨット安心が出來るものもある。又或人の如きは信が獲たい〳〵と悶えてをつたのが何時とはなしに胸の中が喜びに一ぱいになつて三日間も食物の味も知らずにボーとしてをつた人もある。中には非常に神秘的な經驗をするのもある。今から十年ばかり前

東京に居た時、四十五六のお主婦さんが雜誌の中で私の文章を讀んだといふので訪ねて來た。何處に居るかといふと鐘淵の紡績會社に居るといつて、信仰の經驗を話したのを聞くと、この人の夫が妾を持ち、とう〳〵自分の家へ引き入れた。三人子供があつて修羅道の生活をしてゐた。愈々決心して或る晩二歲の子供を寢かし、近くの一町ばかり離れて居る川の中へ飛び込まふとした。「私は妾の事を思へば悔しうて仕樣がないから、わしが死んだら少しは寢覺めがわるからう。最後には彼奴にとりついてやらうと思つて、あはや飛び込まふとした刹那、今寢かした子供が火のつくやうに泣き出した。其の子供の泣いて居る聲を聞き乍ら、どうしても飛び込めない。あの子供をもう一ぺん寢かして死なう、かう思つて家へ歸つて來た。所が子供はスヤ〳〵と眠つてゐる。この一刹那電光のやうに閃いたのは平生聞いてをつた「招喚の勅命」といふ事であつた。正しく之は佛の喚聲だ。今の場合に私は誰が來て自分の命をとりとめやうと

しても死ぬるが、唯一つ子供が泣き出すといふ事丈で飛び込めない。今佛が喚んで下さるといふ時には子供となつて喚んで下された。これが如來の喚聲である」と有難く思はずそこへ泣伏した。翌朝妾と主人の前に手をついて。「私はお前方を取り殺さうと思ふて居つたが、昨晩佛法を信ずる事が出來るやうになつた。どうか、かうやつて居れば毎日地獄の生活をしなければならぬから今日限り暇をとります。其の代り子供三人は私貰ひ受けたい。あなた方は之でどうか藥に生活をして貰ひたい」といふと二人は遂に得心する。親類の者も眞面目に云つたから得心したので、爾來三人の子供を育てゝもう大きくなつたから私と一緒に同じ會社に雇はれて居る」云々。隨分神秘的であるが併し是によつて如何に信念の力の大きいかといふ事がわかると思ふ。韋提希夫人が牢屋へ入れられたと同じ狀態に入つてた時、此女は死んで彼等を取り殺さうと決心した。この煩惱の高まつた最絕頂に信の眼が開かれて、久遠劫來の「我」の煩惱が根本から崩れたのである。觀經には、韋提希夫人に苦惱を除く法を說かうといはれた。其の時夫人は住立空中の如來を觀た。其の佛を見た時に佛力によつて無量壽佛を見る事が出來たといつて牢屋の中で喜んだ。其の信仰の內容を釋尊は重ねてお說きになり、佛の身なるといふ事は佛の心を見る事である。如來のお心は大慈悲である。如來を見るといふ事は如來を信ずる事である。如來を信ずるとは、限りない無緣の大慈悲を以つて衆生を助け給ふと信ずるのである。斯ういつて議佛如來は心の中には入つて下さるといふ有名な文を釋尊は說かれたのである。

佛と我との交流

是が即ち所謂釋尊の自覺敎に對する救濟敎の說示で、斯樣な說示によつて韋提希夫人は牢屋の中にあつて救はれたのである。どうも是れ以上人間の力としては說く事は出來ないと思ふが、唯此に面白く感ずるのは、曇鸞大師は、我々の心を水に譬へ、此の水に影が映る喩を出して、水の淸い時でなければ影は映らぬとせられたが、之を私は今日の譬を以つていへば電氣が可いと思ふ。其所に一つの電燈がありますが其の源

には大きな發電所があつて何十萬ボルトといふ非常な大きな電氣を起してゐる。それが針金を傳つて適當に裝置されると、燈が點く。其の火は眞空の球の中に光つて居る、昔の言葉の中に道は虛に集る。虛ろになつた所に道は集るものであるといふが、之と同じく電氣は眞空になつた所には入つて其所に明煌々たる光を發するのである。佛と私との關係は

佛

佛は即ち大きな電氣が起きて居る所で、我々が若し何十萬ボルトの電氣に其の儘觸れるならば忽ち電死して仕舞ふが、適當の裝置をすれば五十燭とか百燭とかの電燈となつて輝く、而もそれは眞空の球の中に輝くのである。佛も其の通りで大光明を放つてその大いなる光は一つの線を通つて我々の心の中に輝く、而も其人相應に、或は十燭、或は五十燭といふ風に馬鹿は馬鹿ながら賢いは賢いながら其の人相應の光を發揮

私

して居る。次に此の線は何であるかといふに、此の線は即ち敎法である。『華嚴經』に曰く、

音聲は如來に非ず、
音聲を離れてはまた、
如來等正覺を知らず　　此の理甚だ深妙なり。
若し能く分別して知らば　　無上道を莊嚴せん。(七)

そこで佛と我々の間は、電燈と發電所の間に電線があつて電氣がそれを傳つて電燈が輝く如く、佛と私の間の電線をなすものは何であるかといへば敎法である。敎は聲である。音聲は如來に非ず即ち電線は電氣ではない、併し電線を離れて電氣を知らざる如く音聲を離れて如來等正覺を知らず。敎法は音聲である音聲は佛ではない。私の聲は佛ではない。併し聲を離れて又如來等正覺を知らずで、佛と私が一つになれば聲によつて如來を顯すより外に仕方がない。釋尊は一代五十年間の敎法は聲を以つて說かれた。私の云つて居る此の聲が即ち電線であるから其の儘如來であるかといへば、如

來ではない。併乍聲によりて如來の電流が諸君の胸に流れるのである。「此の理甚だ深妙なり」此に至るともう何とも言へんものであるから結論を出して甚だ深妙なり。仲々言ひ得ないのである。若し分別して知らば無上道を莊嚴せん。もうこれより外にどうする事も出來ない。それ故私と佛の間といふものは聲で繋がれるのである。即ち能く聞くといふ事である。蓮如上人は只佛法は聽聞にきはまることなり云々といつて居られるが、華嚴經にもそれと同じ事を言つてある。佛法は聞法、即ち法を聞くといふ事にかぎる、法を聞くといふ事が佛法の始めであり終りである。佛は聲を離れてはない、其の聲を色々のものに書いたのが經文となつて來る。夫であるから我々は只聞くといふ事にきはまる。色々樣々聞いて居る。時々に飛躍して佛の胸に入り、佛、我等の胸に入り給ふ。

佛と人との間の神秘の橋

佛と私の間に溝がある、此の溝を飛び越えなければならぬ。天と地、絕對と相對の間に神秘の橋が架けられねばならぬ。所が私と絕對の間には巧い橋が架らない。此方の方は此の岸、彼方の方を彼の岸、此岸と彼岸を繋ぎつける爲に色々の法がある。久遠劫來流轉して彼岸と此岸と更に合はない。此頃は無線電信があるが、佛法も始終聽いてをれば、自ら、彼此の岸に眼に見えぬ教法の線が架せられ、如來の電流が此岸に來りて美しい光りと輝いて下さる、此場合明からに自分は信仰生活には入つたと喜ぶやうになる。親鸞聖人は初めて喜ぶといふので初歡喜地の位に入ると仰せられた。今迄精神の本當の落着き場がわからず、立脚地が定まらなかつたのが、今や堅固な大地に足を下すやうな愷さを覺える。信仰は遠い所ではない。實際問題に當つてはどうしたらよいかといふ事で實に困る事がある。其の時に單なる人としては人間の力は盡き義理立てやうか、どうしてよいかわからぬ場合には、どうしても信念といふもので解決するより外はない。清澤先生は「如來の大命」といふことを云はれた。吾にはよく

岐路へ立つことがある。一方へゆげば、一方は捨てねばならぬ。而もいつ迄も立ち盡すわけにゆかぬ。どつちか一方へ歩み出さねばならぬ。即ちどつちか一方捨てなければならぬ。此時自己を虚うして如來に歸り、大命を仰ぐのである。如來は行くべき道を示し給ふ。これが大命である、如來の命令であるならば火の中水の中、如何なる所へでも行かなければならぬ。そのことが他人へ迷惑をかけるやうなことがあつても自分の我儘でかけたのではない、さうした信念に住するのである。私は今日迄、自分の多く實驗した所では、自分の信じて進むことに反對が起るとする。自分としてはやらなければならぬと思へば思ふ程反對が起る。其の時に自分はその反對は自分に贊成して居るので、贊成も極れば反對となつて表はれると味うた。反對を贊成と聞くのは可笑しいが、自分に信ずる所があれば反對が贊成の變形としか取れないのである。莊子の中に「一心定れば天下に王たり」といふ言葉がある。之は確かに自覺者の聲である。自分の心さへ定つて來れば天下に王たり唯我獨尊である。釋尊が「天上天下唯我獨尊」と叫ばれた意味は、信仰を得れば世界の王であり靈界の王である。何者にも支配せられない。極めて自由である。信を得れば天魔鬼神も慴怖し惡魔外道も恐る、從つてそれに碍げられる事はないから念佛の行者は無碍の一道であると親鸞聖人はいつて居られるのである。

信仰を言葉で說き表はすには先づこゝらが關の山かも知れぬ。釋尊が韋提希夫人に向つて「汝は心想羸劣」といはれた。心が羸れて劣つて居るから我々が自分で思案したり分別したりした事を投げ出して仕舞はねばならぬ即ち總て自分を投げ出して仕舞ふのである。私が大正五年十二月に喜望峰を廻りて南阿のある港を出て愈々危險區域には入つた時、一艘前に襲撃されたから注意せよといふ事で其の時豫て覺悟はして居つたが、どうも工合が惡い。死ぬかと思へば情けない。甲板を散步しながら泌々と死ぬことを何とも云へず厭に感じた。其の時に、自分は、何だのかんだのと思ふのはいかん、自分は心想羸劣で、死ぬか生きるかさへわからない者だと觀念して、自分を拋

棄する外はないと思ひ、自分を投げ出した時に、自分の精神は、初めて洋々として佛の愛に蘇つた。一切諸佛は法界身であつて、心の中へは入つて下され又佛は心想より生ずるとは此の事である。駄目だと思つた時に一種の力を得るのである。さういふ力といふものは學問から來たのでもなければ、考へて出て來たのでもない。神秘不思議の力と自分は感じてゐる。

先に信に入る人の際立つた例をあげたが、實の處、大部分の人は、あゝした際立つた入信でなくして、だん〳〵聞いてゐる中に、自と法が心に泌み込んで、疑ひたいと思うても疑ふ事の出來ないやうになる。

禮拜の意義

扨てかやうに申しても、信の體得は理解丈では獲られないものであるから、聞法といふことも、深く考へゆけば、單に耳に聽くばかりでなく、全身に聞かねばならぬ。そこから自ら禮拜が生れてくる。

中世紀には基督敎はバイブルを公開しなかつたから、拜むのが經典であつた。宗敎は神秘で頭の理解丈ではいけないから、莊嚴な殿堂の聖壇を禮拜する、禮拜を通じて信仰する事が出來るから經典を公開する必要がない聖書は讀んでもわかるものでないと極端に云つてありますが一面の眞理をもつてゐる。觀經の文の中にも此の通り言葉を盡し理を盡してあるが、是れ丈見て居つても電氣がかゝつて來ない。私が感じたのは拜んで居つた時何時感じたかわからぬが、說明すれば佛が私の心の中に入つて下され、私の心から出て下されたといふより外はない。事實としては不思議と思ふが、只佛樣を拜んで居つたといふ其の時に一種の靈氣に撲れた。前述の如く如來を物質によりて說明すれば電氣が一番よい。電氣は物質であり乍ら餘程精神に近い敏活のもので、それに感ずる時は少くとも吾々の感覺よりも早い人間の神經よりも早い。

佛は我の如し

華嚴經の中に佛は我の如しといはれてあるが之はどういふ事かといふと「我」とい

ふものを考へたとする。自分はどういふものであるかと、だん〳〵考へていつて、朝御飯をたべた、風呂へ入つた、眠つたと考へる。併しさうした考へられる自己は、眞の自分でなくして、既に投げ出された俎の上へのせられた自分である。だからそんな自分を今現に考へつゝある自分は頭の奥に眼を光らせてゐる。然らばその考へつゝある自分の頭の奥に眼を光らせつゝある自分は何者であるかと考へると、早や第三に考へつゝある自分が更に頭の奥が控へてゐる。何處までいつても果てしがない。如來はこの自覺の光りの行き届かぬ領分へ電氣の如くに乘り移つて下さるのである。

電氣は感電したと思ふよりも早く感電する。如來もそのやうで我々の意識でかうだとつかまへる事が出來ない。つかまへられるならば、私の支配内に屬す。これは私を救濟する事は出來ない。如來は私を救濟するものであるからつかまへられない。如來は私につかまへられず、私が如來に捉へられるものである。わかれば信ずるといふ人がある。佛は私共に解るべきものでない。もし斯うとわかつたら信じられるものでない。わからないので初めて信の對象となる。

信と智との關係

今試に信と知に關する一例を擧げれば、どうして吾々は母を認識することが出來るであらうか。若し私の母だと信ずるといふ事が出來なかつたら、恐く吾々には母はないであらう。生れて七八年間は暗黑時代である、平宗盛は傘屋の息子で生れた時に本當の清盛の子と取換へたといふ。私は何處かの落胤で、それを私の兩親が貰ふたのかも知れん。傍らの者が、さうでない、何兵衛の子であるといつても夫を確證とすることは出來ぬ。

その智の眼の届かぬ所を信はよく補うてくれる。此場合母を母と信ずることで充分である。わかつてからと思つたら永久に自分の母は信ぜられるものでない。又子に就ても母丈は自分の子といふ事がわかるが父は恐らく自分の子といふ事は認識出來ないだらう。まさか間違はないだらうと信じて居る位なものである。俺に似て居るから自

分の子だらうと思ふと、そばに居る者にはよく似るさうだから、似て居るから自分の子と思ふても間違ひがないとも云へぬ。其所迄は行き届かぬ、行き届かぬから信ずる。信ずると都合がよい。若し之を疑つて御覽なさい。家の母は本當のお母さんか知らん、成る程よく考へれば變な所がある、ほんとうの親ならばあんな無理なことは云はれまい、之は實の親でない證據だといふ風で何時とはなしに變な親になつてしまふ。之を救ふのは信である。哲學で智信問題は隨分八釜しいものであるが母親の例でよく解ると思ふ。たゞそれを信じて居る。智からいへば胡魔化して居る。詰り信が先である。信ずる事が先に始つてゐる。後から智慧が行くが行き届かぬ。そこで信の天地を承認せざるを得ぬ。床屋へ金を出して自分の命を預けて居る。若し中途で狂氣になつてグサッとやらぬといふ事は保證が出來ない。併しやれば向ふも損であるからまさかそんなことはやらないだらうと信じて居るから安心して髯を剃つて貰ふ事が出來る。この湯呑だとて、まさか一々熱湯を以つて洗つたわけではないだらうと思うて疑へば、どういふ黴菌が附着いてゐるかも知れぬ。私の知つて居る人で便所へ入るには必ず着物を更へて行く人がある。何ぞ黴菌がついてはいかんといふのである。要心深いかも知れぬが、常識的に脫線して居るといつてよからう。若し我々が智丈で生活して行つたら、一日も生活は出來ない。智の行き届かぬ事夥しい。信仰によつて空氣を吸ふて生きて居るのである。實に信といふものは精神上極めて重大なものであつて、信によつて一切は成立して居るといつてよい。重大な事になると信を本とする外はない。何事をなすにも智丈で以つて、知つて居るといふ事が學問であるとするのが現代文明の基調をなしてゐて、智の中へ囚へられて、わかつたら信ずるといつて居る。實際宗教は實行的のもので、或醫科大學にをる學生で、まだ高等學校に居つた時分に、突然私に信仰上の質問をして來た。其の時「信仰は難しい物ではない。腹が減つたら食はなくては都合が惡いから食ふ如く、信仰も我々が信じなくては都合が惡いから信ずるのである」といつてやつたら、テーブルを叩いて「さうだ」と合點し、非常に喜んで

早速手紙を書いてお母さんに遣つた相である。お母さんは非常に信仰家で、この學生にいつも信を勸められたのであつた。……此の人もヒヨットした妙な所に機緣があつた。結局科學上の智慧を主にする事が出來ないといふ事は誰しも頭に置く必要がある。極めて偉大なものゝ前に吾々は自分を投げ出さなければならぬ。智を主として居る自分を拋擲せねばならぬ。かやうに雜念を拂ふて居れば我々の行く可き道は坦々として通ずる。外へ迷ひ込まふとする道を閉ぢてさへ置けば、如來に行く可き正當な道は吾々を導く。順逆いづれの境界にあつても韋提夫人とゝもに阿彌陀佛の極樂世界に行きたいといふ願を起すであらう。智識に欺されず、享樂的欲望を止め、正しく見、正しく思惟へれば我々の行くべきは、たゞ信心の一道となる。

參考

(一) 我建二超世願一　必至二無上道一　誓不レ成二正覺一　我於二無量劫一　不レ爲二大施主一

普濟諸貧苦　誓不レ成二正覺一　我至二成佛道一
名聲超二十方一　究竟靡二所聞一　誓不成正覺

(『大無量壽經』)

(二) 汝今知不阿彌陀佛去レ此不遠……發二菩提心一深信二因果一

(三) 如來今者敎二韋提希及未來世一切衆生一觀二於西方極樂世界一以二佛力一故當得レ見二彼淸淨國土一如下執二明鏡一自見中面像上見二彼國土極妙樂事一心歡喜故應レ時卽得二無生法忍一

(四) 佛告二韋提希一「汝是凡夫心想羸劣未レ得二天眼一不レ能二遠觀一諸佛一如來有二異方便一令二汝レ得見

(五) 佛當爲レ汝分二別解一說除苦惱法一……說二是語一時無量壽佛住二立空中一……時韋提希見二無量壽佛一已接足作禮白レ佛言世尊我今因二佛力一故得レ見二無量壽佛一

(六) 以レ觀二佛身一故亦見二佛心一佛心者大慈悲是以二無緣慈一攝二諸衆生一

(以上『觀無量壽經』)

(七) 音聲非二如來一　離レ聲復不レ知二　如來等正覺一
是處甚深妙　若能分別知　莊二嚴無上道一

(『華嚴經』第十)

時未生怨王子患二指瘡病一將諮二王所一王抱二懷中一以レ手摩拭以レ口嗍レ之。其時王子啼泣不レ止、王既喫二

其纏縛二穴破膿血在二於口中一唾二膿於地一太子見二膿在一レ地更啼不一レ絕時大夫人韋提希見二此事一已吁嗟嘆息、時未生怨王見二母噭嗟嘆息一問言何故噭嗟答曰、曾祖以來未一レ有二此患瘡一汝亦曾有二此患一王父嘲二汝瘡上一有一膿血一便欲却不一レ唾二於地一長二見一レ膿時恐見一レ膿汝更啼一乃至爾時未生怨王瞋心止起二憐愛心一語二諸臣佐一如有一レ人一レ言二老王活一者分二國半位一人於二老王一皆生二憐愛一聞二王此語一奔競走看、其老王遠聞二走聞一極衆在一レ獄驚懼作二是思惟一必當二喚一レ我種々苦刑一長嘆喘息迷二悶於地一便卽捨一レ命

（『根本說一切有部毘奈耶破僧事第十七』）

第四講　救濟教の說示（下）

救濟教の說示といふ題に就いては全く前講で終りを告げた譯であるが、尙他の一面から、矢張り救濟教の說示を見て行く材料——卽ち阿闍世王の入信及び提婆達多の救濟といふ此の二つがあるのである。

此の阿闍世王及び提婆に對する釋尊の救濟教の說示は、韋提夫人の場合のやうに明瞭して居ないけれども、其入信の結果は明瞭になつて居る。固より阿闍世に對する釋尊の敎誨は『涅槃經』に詳しく說いてある。しかし夫は餘程、王の異狀な場合の煩悶に對する敎で、一般救濟敎として『觀經』に說かれたものではない。それで本講には阿闍世入信の徑路に就てお話をすることにした。

阿闍世王の入信

これには種々の材料があるが、最も歷史的に原始的なものと謂はれて居るのは『長

阿含經』――四阿含經の中で最も古き編纂と謂はる――で、其お經の中に『沙門果經』といふお經がある。沙門即ち僧になつた結果、沙門の結果といふものがあるか無いかといふことを問題にしたもので、即ち因果の有無を書いてあるお經である。此お經はそのまゝ阿闍世の入信した事を書いてゐるが、非常に簡單で、(一)或る夏の十五夜の事、殊によい月であつたので、阿闍世王は諸々の大臣を集めて「斯樣な好い月の夜をどうして過したらよからうか」と相談すると、諸臣は交々、或は「斯樣な名月の晩は何ぞ軍隊でも調練して夫を御閲兵なされたならよからう」といふ者もあり、又「王舍城に在る色々の學者――六師外道の人達を集めて其の話をお聞きになつたらよからう」といふものもある。其の時前に述べた、耆婆大臣が「此の樣な結構な晩には私の邸宅へお出で下さい」と申す、王が「卿の家に何かよい事でもあるのか」と訊くと「私の所で此の夏の安居に釋尊の敎團の方々を御招待申し私の園で安居をして居ります（即ち夏期講習會であるが安居といふ言葉は「安く居る」で釋尊はいつもあちらこちらお廻りになるが、夏になると第一に罪を作るのは虫が出るので方々廻ると虫を殺すから夏だけ一所に止まつて敎界の模樣を報告し合ひ、各自の智慧を清新にする爲に、夏期講習會を開く、是を安居といふ）どうぞ斯ういふ月のよい今宵私の所へお越し下されませ」で阿闍世王は耆婆の言を容れ大きな象に乘つて耆婆の邸園へ赴いた。時に月光は水銀のやうな光を投げ、千二百五十人の大敎團は寂然として廣き園内に靜まりかへつて居るので、阿闍世王は其莊嚴な光景に打たれ怖れて、耆婆に對し、「卿は俺を釋尊の所へ連れて行くといつて、其の實は伏兵を置いて居るのではないか。」「そんな事は決してありません」と耆婆はいつて愈々釋尊の所へ詣く、而して色々話を聽き、戒律を修め、坐禪をして智惠を磨くところの宗敎的生活をしたならば、其の結果が必らずあるであらうかと王は釋尊に御問ひ申した。釋尊は「因果の道理といふものは嚴然としてある」と種々の例を出してお話がある。其の時に阿闍世は俄かに父に就て世尊へ申し上げるには「世尊よ、因果の道理があるにも係らず、私は暗愚

にして正法の王たる我が父頻婆娑羅を殺しました。詢に申しわけのない事を致しました、どうぞ私の懺悔をお聞き下さい。」釋尊は其れに對し、「王は能く懺悔した事である」といつて非常にお讃めになつた阿闍世王は喜んで又耆婆と倶に象に乘つて王宮に歸つた。

これが最も簡單な原始的傳說である。所が是れ丈の事では薩張りわからぬ。あの恐ろしい罪惡を犯した阿闍世王がたつた是れ丈の簡單な事で盡せる道理はない。阿闍世王が悔悟する時に釋尊に「暗愚にして正法の王たる父頻婆娑羅を殺しました。實に申譯ない事をしました」斯ういふ簡單な文字ではどうしても物足りない。其れを『涅槃經』によると非常に明らかに書いてある。

涅槃經の阿闍世

『涅槃經』には南北の二本即ち舊譯と新譯とがあるが大低同じい。其によると、阿闍世が非常に煩悶して終ひに佛教に歸依して行く狀態が非常に詳しく書いてある。之は有名なもので、其の外に『根本說一切有部毘奈耶破僧事』といふ戒律の經典がある。毘奈耶は戒律で、小乘有部宗の戒律書で五逆罪の一たる僧の和合を破ることを書いたもので、その第十七卷二十卷に阿闍世王の事が書いてある。併し是は大體に於いて小乘の經典に散說せられてゐる事實と大同小異である。だから阿闍世王の入信の經路を知るには大乘の『涅槃經』は最も有力な資料であると謂はれるのである。

先づ阿闍世王は心に悔熱を生ずるというてある。後悔から熱を生じた。阿闍世王は剛毅果斷の人で、年若くして父を殺す程、惡に強ければ善にも強い道理、釋尊の滅後王舍城で第一回の結集を開いた時には外護者となつて大迦葉に歸依し、大迦葉が亡くなつた後で阿難に歸依し、阿難が亡くなつた事を聞いて悶絕して地に倒れたと云はれた人である。夫れ位佛法には非常に歸依した人で、父を殺す位强い人であると共に、敎法に對しても信仰が深かつた。

さて阿闍世王はどうして悔熱を生じたか、單なる後悔でなしに後悔する事によつて

熱が出たといふので、これは如何に沈痛な後悔であつたかを表はしてゐる。最も夫には種々の原因があつて阿闍世王の後悔を促したに違ひない。子供の憂陀夷に腫物が生じたその膿を阿闍世は自分で吸ふてやつた。時に韋提夫人はおん身の父もおん身の子供の時にそんなに膿を吸ふたのであるといつた。それも非常に後悔の動機となつたに違ひない。子供の可愛いゝ事から親を虐待した事を後悔した。其後悔のだん〳〵生じた所を『涅槃經』には悔熱を生じて滿身瘡が出て來た、夜も眠らず神經衰弱に罹つたと書いてある。そこで六師外道の弟子の大臣達は一々阿闍世王の所へ見舞にまゐる。『舊約聖書』に約百記といふ書物があるが、約百が惡魔の爲め自分の財產や子供を奪はれ、身體に腫物が出來て瓦の缺片で掻いて苦んで居る……さういふ風な心に王もなつて居る。六師外道の弟子の大臣達は「王樣、何故そんな蒼い顏をして頭の髮を亂して苦んで居られますか。人間といふ者は睡眠を好めば睡眠益々滋く、酒を嗜み婬を貪るのと同じく、樣々に心配すれば心配は彌々益々甚しくなるものであります。」といつて各々自說を述べるのであるが大體の結歸は孰れも因果否定である。「王樣は親殺しをなさつたが、さういふ者は昔からごの位あるか知れない。そんなものを一々心配してつたらたまらぬではないか。斯いふ事は世の慣習であるから心配するに及ばない。」と云つて世の慣習といふ事で心配を除らうともした。因果の道理即ち原因結果はないものであるから心配する事はないといふ事を色々並べる。しかし乍ら阿闍世王にとつてどうしても自分の子は可愛い、自分の子が可愛いといふ事實を否定する事が出來ない。親として自分の子が可愛いといふ事實はどんな理窟を持つて來ても阿闍世の心から抜き去る事は出來ない。若しやもし自分の可愛い子供が自分に及を向けた時自分は果してどうなるであらうか。——之は現實の事實であるからどうする事も出來ない。斯う思ふ時、阿闍世は情け深い其父頻婆娑羅王に對して及を向けて殺したといふ事を世界に幾らでもありふれた事だ、因果は無いものであるから心配するに及ばない、丈ではどうしても解決が出來ないのである。私は之が宗教の非常に深い根抵に目醒めた

所であると思ふ。

宗教的自覺

宗教といふものは一面非常に空想的のやうに見えるが決して空想でもなければ單なる理想でもない、さうかといつて又宗教は決して無意味な現實を主とするものでない。つまり此の中間に深く突き入るのが宗教である。單なる觀念論、理想論ならば、六師外道のやうに幾らでも理窟が附く。自分はどんな事をせうと理窟をもつて誤魔化す事が出來る。しかし乍ら心の奥底にはさういふ現實を離れた理窟でもつて現實を拭ひ去る事は出來ない。さうかといつて唯々現實丈に沒頭して居るかといふと然うではない。其の現實は又能く理想を以つて淨化するものである。私は宗教といふものは本當の意味の現實主義であると思ふ。英語のリアリズム、隨つて宗教家はリアリストである眞の現實主義は物質主義ではない　單なる理想主義又は空想主義者ではない。始終現實に立場をおいてゐる。いつも現實の立脚地を離れないで理想　開顯し實證するのである。阿闍世が親を殺したといふ現實を一つの空想や理想の詭辯を以つて何でもない事であると言ひ紛らし其の事實を拭ひ去つて了はふとするのは本當の宗教ではない。本當に反省して實の相の上に得脫するものでなければならぬ。又さうかといつて物質主義の立場に立つて、自分に不都合をやつたから殺したのであるからどうでもよいと云ふやうな物質的の考から現實に立つのでもない。飽く迄現實に立つて居る、けれども、現實に立脚して居ながら始終理想を求めるのが本當の宗教である。之で阿闍世の今の半面が非常に明になつて來ると思ふ。阿闍世は自分の父を殺したといふ現實を解釋するに當つて、空想論で考へて見たり、物質的功利主義の立場から考へて此の事實を否定し去らうとするのではどうしても自分の心の滿足が出來ない。前申したやうに子供が可愛いといふ事實を否定する事が出來ないと同樣、自分の父を殺したといふ事實も拭ひ去る事は出來んから、其に對して滿足な解決を與へやうといふには唯一つ眞實の智慧をもつてよく反省し味解することである。即ち殺害は無論罪惡であるが、そ

こには斯ういふ解脫の方法がある。あなたは現に父を殺したのは惡い、惡いから悔むといつて悔熱を生じ滿身瘡を生じて苦んでゐるといふのは是れ尤もであるが、さうかといつて其處に沒頭してばかり居てはいけない。惡い事は惡いとして、其の上に其れを淨化して行く、即ち現實は現實としておいて其の儘淨化して行かねばならぬ。例へば大根なら大根に肥料をかければ、其れを分解してよいもの丈攝つて大根はだん〳〵太つて行くやうに、惡いものは惡いとして其れを淨化して行く事が最も肝要である。父を殺したといふ事は誠に惡い事であるが、其の儘ではその罪惡の肥料を容れることは出來ぬ。そこで精神上に色々の道はないかと求める。物質主義者は物質的に現實を肯定して行かうとし、同じ理想主義の中にも空想論者は現實を拭ひ去つて行かうとし又は現實を否定せんとする。此等によつてはどうしても衷心滿足が出來ないのである。

耆婆の教誨

此の時に當つて耆婆が出て來て阿闍世に訓誡を試みた。「大王よ二種の白法がありま

す。」(二) 佛教では白いのが善で黑が惡である。尤も日本でも「黑白を分つ」などいつて矢張り白は善、黑は惡である。)二種の白法、即ち善法がある。(斯ういふ塲合に法といふ字は物柄といふ意味) 二つの善い物柄がありまして、能く衆生を救ふ。即ち一つには慚であり、二つに愧である。慚愧といふ事は非常に大事なものである。慚愧は後悔とは違ふ。阿闍世王は今困つた事をしたと後悔して居るが、後悔の時は精神の奥底に疑の根切れがして居らぬが、慚愧になると申譯がなかつたと頭が下がる。阿闍世が後悔をしたから耆婆が慚愧を說いた釋尊は「慚愧は諸々の善の衣服である」と說かれた。善を體に喩へると慚愧といふ德は、丁度あらゆる善根の着物のやうなものである。慚愧といふものが無いと、高慢になるからして、慚愧といふものは諸善の衣服であると謂はれた。

耆婆は釋尊の教を聞いて居るから爰に慚愧を說いた。慚愧といふものは前述の如き父を殺したといふ事實は決して否定しないで之を肯定する。父を殺したといふ事は誠

にすまない事である。申譯のない事であると後悔してゐる。其の徒らに悔んでゐる間は慚愧とは非常に心持が違ふ。後悔してゐる間は色々辯解がある。餘程功利的な考があつて、あゝなるのは誰某が惡かつたのだといふ風に後悔といふ事丈ならば自我の根切れがしない。だから非常に煩悶がある。併し慚愧といふ事になると、父を殺したといふ事の罪は一身に全部を引き承け、私が惡かつたのであると眞に頭を下げる其の精神狀態が慚愧である。阿闍世が正しく求めて居つた教へであるから阿闍世は非常に怖れたのである。其れがすむと耆婆は色々樣々に說き、「それでありますから、これから釋尊の所へお出でになつてあなたが助かる所の法を聞かなければならぬ」といふ事を熱心に申した。『涅槃經』によると其の間に隨分長い耆婆の忠告の言葉がある。耆婆が色々いつて居る時に天の一方から聲が聞えて來た即ち天の聲である。「大王よ速かに佛の所に往くがよい。佛世尊を除いては汝を救ふ人はないであらう汝を愍んで今かやうに勸めるのである。」(三)

斯ういふ聲が天の一方から聞えた。

大王は是の語を聞き已つて心に怖懼を懷き、身を擧げて戰慄した。芭蕉の樹の風に戰ぐやうに慄えた。仰いで而も答へて曰く「色像を現せずして但聲のみあるは汝誰でありますか。」

「大王よ、私は汝の父頻婆娑羅王である。汝は是から直と耆婆のいふことに隨ひ、邪見六臣の言に隨うてはなりません。」時に王聞き已つて悶絶した。

實に沈痛深刻を極めて居る。殺された父親が、今阿闍世王が六師外道の言ふ事を聞かうか、耆婆の言ふ事を聞かうか、此の煩悶の最中に天の一方から斯ういふ聲が聞えたといふ事は色々に解釋が出來ると思ふ。無論阿闍世王としては本當に聞いたに違ひない、本當に天の一方から斯ういふ聲が聞えたものだから、何者であるか！、斯ういつた時に汝が父頻婆娑羅王である。お前の一大事な時であるから佛の所へ行け。如來に行くより外には道はないといふ聲を聞いて阿闍世は悶絶してしまつた。氣絶してし

まつた。さうして氣絶をしたから皆大騒ぎをして、水をかけて氣を吹き返した。其の時に色々話もあるが、それは略し、爾の時に釋尊は、愈々阿闍世の善根が潤熟して、佛法を聞くやうな心を開いたといふ事をお考になり、月愛三昧に入られた。

月　愛　三　昧

月の愛の三昧である。(三昧は禪定である。之は釋尊がいつもお經をお說きになる前には必らず禪定にお入りになる。『大經』をお說きになる時には大寂定にお入りになり『華嚴經』の時では海印三昧にお入りになつた。)阿闍世王が將に教を聞いて入信せんとする前に、釋尊が月愛三昧にお入りになつたとは、どういふ事であるかといふと、印度の蓮華の中に月の光を見て開く蓮華がある。即ち月の光の愛によつて開く所の華である。それといふのは、將に此の阿闍世の心を開かしめんがために釋尊は、一つの三昧にお入りになつた。丁度月の光によつて蓮華の花が開くやうに、定にお入りになると、定の中から一つの光を放つて阿闍世を照された。所が阿闍世王の體に今迄滿身に出てゐた穢い腫物が立所に皆んな癒つてしまつた。そこで阿闍世は「耆婆よ此の光はどういふ光であるか」「それは釋尊がお入りになつた禪定の中から放たれた所の慈けの光であります。世尊は先づ王の心を癒す前に王の身を療して下されたのであらうか——こゝに救濟教のひらめきが非常によく現はれて居る。私のやうな父を殺した斯ういふものを世尊はどうして月愛三昧にお入りになつて、斯ういふ光を以つて私の身體を癒して下さつたのであらうか——惡い者を世尊は何故可愛がつて下さつたか、斯ふいふ疑問が起つて來る。

耆婆答へて曰ふ。(四)「譬へば一人にして而も七人の子あり、この七子の中一子が病むとすれば、父母の心は平等であつても、偏に病の子を思ふ。如來亦爾り、諸の衆生に於て平等ならざるにあらず、然れども罪ある者に於て心則偏に重し。」

如來は一切衆生に於て平等の心を以つて居られるけれども、併し罪のある者に向つ

て重く心をかけ給ふ。不放逸の者には心則ち放捨す。」放逸でない、おとなしい謹嚴な者には御心配はないが、放逸の者をことに如來は慈み給ふ。

茲に即ち救濟教の眞髓が說かれてある。此の救濟教に於いての原則は惡いもの、罪惡の者、殊に弱いもの、さういふ者が釋尊の救濟教の對機となつてゐる。自覺教にあつてはさうではない。自覺教の教團に入るには第一に身體が健全でなければならぬ。父親母親の許しがなければならぬ。大菩提心を起さなければならぬ。智慧が勝れて特殊の希望を以つてゐるえらい人でなければどうしても自覺教には入れない。其の自覺教に對して救濟教を說かれたといふのは救濟教には佛の慈悲といふものが主になつてゐる佛の心と云ふものゝ根底は慈悲の外はない。此の慈悲がどうして衆生の方へ下つて來かと云と、此の慈悲と云ふものは水の流れる如く必らず下に向つて來る。罪ある穢れた罪濁の者に向つて流れて來る。それでよく譬にも高原の陸地、高い所の岡には蓮華を生じない。

泥中の蓮

然るに泥の中に却つて蓮華が生ずるとある。佛のお慈悲の蓮華は自覺教の對照となる所の智慧や能力ある高原の陸地には生せない。即ちさういふ不放逸のものに對しては佛の心は放捨して心配しないといふのは、佛心の蓮華は高原の陸地には生ぜずして却つて泥中より生じて來るの謂であります、救濟教といふものは是れから起つてゐるのである。佛の慈悲といふものを主とした時に如來の救濟教は起つて來たといふ事が明らかになる。親鸞聖人は「善人尙以つて往生を遂ぐ如何に況んや惡人をやと」喝破された。善人とは即ち茲でいふ所の不放逸の者であつて罪のない自覺教の對機である「惡人往生す如何に況んや善人をや」惡人でも往生が出來るのだから善人が往生の出來ないといふ事はないといふのは當り前のやうに世間でいふ事であるが、救濟教にあつてはさうではない。水の低きに就くが如く、如來の本願は、罪ある者惡人を救濟す

るのが本意であるからして、お相伴の善人さへ往生が出來るのに正客である所の惡人が往生が出來ぬ事があるものかといふ意味で、惡人正機の本願といふ事が謂はれるやうになつた。惡人が正しく本願の對手になる。惡人が何で正しく相手であるかといへば、佛の慈悲の對象となるものは惡人であるからである。それでは惡人が慈悲の對象になつて救濟されるなら、惡い事さへすればよいかといへば、そこはいつも八釜しくいはれる事で、之は往々にして間違ひ易い。惡人正機とは慈悲の方からいへば惡人といふ事がしき相手である。けれども受ける我々からいへば自ら內省して、自分が惡人といふ事がわかれば、わざ〳〵惡い事をする必要がない。又佛の慈悲は惡人が正機だといふ事を聞いた時に自分は申譯のない者である。斯ういふ事になつて、裏からひつくりかへしにすれば善が出て來る。涅槃經の此の文で、耆婆が王に申した「罪ある者に於て心偏に重し、不放逸の者には心則ち放捨す」世尊は不放逸の者に對しては餘り御心配なさらんのであるといふ事をいつたといふ事は、救濟教の一つの根底を爰に示してゐるのである。

其れから王は耆婆に連れられ、釋尊の許へまいつた。所が早釋尊の所へ行かぬ前から親しく世尊の聲を聞き說法を聞いた阿闍世は非常に喜んだ。其の時の釋尊の說法といふのは『涅槃經』に非常に長く說いてある。其の說教は一寸異樣で、異樣といふのは詰り臨床の調合をされたのであらう。多く釋尊が說かれるのは因果の法であるが、阿闍世王の心が餘りに父親を殺した、心に申譯がないといふ考が深かつた爲に王を勵ますやうにお說きになつた。樣々の例をとつて說いてある。『涅槃經』の說相は『觀經』に於て韋提夫人に說かれたやうに明瞭りと鮮やかに說いてない。併乍ら阿闍世王の精神が開悟して佛に向ひ回轉して行く狀態は無論說いてある。兎に角釋尊が救濟教の對象となる可き阿闍世王の心に對して救濟教を說かれたといふ事は無論明瞭である。佛の慈悲は心を癒す前に身を療して罪惡に沈み苦んで居る所に如來の救濟が實現するのである。罪惡を犯したといふ事を後悔して居る。さういふ所に初めて佛の救濟の蓮華

は芽を出すのであるといふ事は、罪ある者に於て心即ち徧に重しといふ事に就て、明らかに救濟教を說かれて居るのである。

阿闍世王の信仰告白

阿闍世は非常に喜んだ、左の有名な文は親鸞聖人が『敎行信證』の信の卷の中に引きになつて居る。阿闍世王の信仰告白である。

世尊よ、(五)我れ世間を見るに伊蘭の樹を生ずるも、伊蘭栴檀の樹を生ずるを見ず、伊蘭は非常に臭い樹で傳說によれば、伊蘭の林へは入つて其の臭氣を嗅ぐと狂ひ死にするといふ程臭いものだ相である。日本人も臭い物に就ては負けないのであるが、歐洲の大都市に行くと大便小便等總て臭い物は流してしまふから一向臭味を覺えぬが、我々風光明媚な京都に居ても、居たまらない程臭い事がある。それは一週に一度位に肥取りである。是は自分もその一部の責任を負はねばならぬから申分はないのであるが、その肥とりが來ると、もういくら香を燒いてもやりきれない伊蘭の實から伊蘭の樹を生ずるのは見るが伊蘭から栴檀樹を生ずるのは未だ見ないといふ。

我今始めて伊蘭の實より栴檀の樹を生ずるのを見る。伊蘭の實とは我身是なり。栴檀の樹とは即是我が心無根の信也。

譬としては誠に適當な譬で、他力信仰の深い味が出て居る、阿闍世王が是れ丈の信仰告白をやるのはえらいものである。臭い伊蘭の子から伊蘭が生える。栴檀からは栴檀が生えるのが世間の習はしである。世尊からお話を承つて見ると臭い伊蘭から栴檀の生じたのを見た。伊蘭の子といふのは即ち我身である。栴檀の樹といふのは我が心無根の心なり、自分の心の中にある所の無根の信心であるといふ事を云つた。之は實は佛凡一體の妙趣で、

佛凡

救濟敎主世尊

人智の沈默

佛凡が一つになつて居る。我身といふのは原本を見ねばわからないが、我身といつても體をいつたのではない。即ち凡心である。眞宗で、「我身は惡き徒ら者」といふ場合に、我身が惡いのではない、心が惡いので即ち凡心である。凡夫の心は實に伊蘭の如く臭く穢いものである。實際、我々の心を考へて見ると自分乍らあきれるやうな汚い事が澤山ある。伊蘭のやうな此の凡心からは、自覺が出て來ないわけである。然るに此の凡心が佛を生んだのであるから、伊蘭即ち凡心から佛心即ち栴檀が生えたのである。此の佛凡一體に就て蓮如上人は御一代聞書にきはどく說明して居られる。

「衆生をしつらひたまふ。しつらふといふは、衆生のこゝろをそのまゝおきて、善きおんこゝろを御加へ候て、よくめされ候、衆生のこゝろをみなとりかへて、佛智ばかりにて別に御したて候ことにてはなく候。しつらうといふは衆生の心を其の儘にして置いて、こはさないで、伊蘭は伊蘭としておいて、よき御心を御加へ候て、他力廻向の佛心をお與へ下されて、よくめされ候たゞこつちの方に團子がある、こつちの方には餅があるといふ風に、二つ別々にして居るのではない。佛心を凡心にお加へ候てよくめされ候と一しよになる。一緒になる所の味は口では發表が出來ない。よくめされ候とは佛の心と凡夫の心が一體になる所で、之は實に巧に表はされてあると思ふ。凡夫の心を皆とりかへて佛智ばかりで、別に佛の心丈入れて凡夫の心を皆なくするのではない。信心は畢竟佛凡一體だから佛心凡心一體である。一つかといへば一つではない。異ふかといへば一體である。私は信仰を戴いたものとしても、凡夫であるから腹の中には穢い欲望がある。凡夫丈かといへばたゞの凡夫ごゝろともなく異つた光が見える。實體は凡夫であり乍らそこに凡夫でない心が起きて下さる。鏡に物が映つた場合に鏡と物體は一つかといへば一つではない。二つかといへば二つでもない。鏡に物の映るのを物理で說明すれば、物はかうした法則に隨つて光線を反射して、斯ういふ角度で我々の目には入るから物が映るや

うな見えるのだといへる。けれども何故映るのかといふ事は科學者の說明し得ざるものである。何故映るか。何故見えるか。……「何故」といふ事は總て人間の智惠の窮るところで「何故映るか」、「斯ういふ譯で」「何故さういふわけで」とだん〳〵何故々々と追窮して行くとしまひにはわからなくなつてしまふ。之は實に不思議で、さういふ一つの約束があるといふより外仕方がない。花が咲くといふ事實に對して「何故咲くか」咲くに就ては色々いふ事は出來るが「何故斯ういふ恰好に咲くか?」「種があつたから」「どうして此の種子があるのか」「さうだから然うだ」しまひにはどうしても斯ういふより仕方がない。そこへ行くと人間の理智は自づと沈默しなければならなくなる。それと同じ事で何も信仰ばかりではない、我々人間の實際目に見てゐる現象の中の總ての物はたゞ不思議の道理によつて、然うなつて居る事を認めなければならぬ。佛心凡心一體の味も夫と同じである。

それで此阿闍世王も臭いものゝ王である伊蘭の實から、香ばしいものゝ王たる所の栴檀の芽を生じたといつた。その栴檀は何であるかといふと、是れ我が心無根の信である。無根の信といふのは『涅槃經』には無根の信を釋して、

無根者、不レ知レ恭二敬如來一、不レ信二法僧一、是名二無根一。

無根といふのは、私は初め如來を恭敬しない、如來を敬ふ事を知らなかつた。又法を信じない、僧を信じない是を無根と名づく。實に立派な解釋である。自分は今日迄佛法僧の三寶を信ずるといふ事をしなかつた。丁度伊蘭といふ臭いものゝ中に香しい栴檀の根がないやうに、我々の心はやはり此のやうに薩張り自分には佛法僧の三寶を信ずるといふものはなかつた。夫が今日圖らずも信仰を得て見ると之はどうも不思議の信心である。自分の穢い伊蘭の心の中には決して栴檀の信仰の根はないが、不思議にも今栴檀の信仰を戴いたから、私は之を無根の信と名けたのでありますと王がいふたのである。

他力廻向の信

救濟教主世尊

此の無根の信といふ事の裏を返せば、詰り之は他力廻向であるといふ事がわかる。他力廻向といふ事は、他力教の中で非常に八釜しい術語になつて居て、此場合廻向はお與へである。併し廻向の意味は元こちらから先方へ捧げること、押し向けることである。だから一般世間でも死んで地獄へ行つたならば助けて貰ふ積りでお經をあげる人々がある。多くさうやうに考へて居る「どうかマア廻向を一つたのみます」といつて廻向料として金を上げる。どうせ生前は碌な事はして居らぬから死んで地獄へ行つたゞらうと假定してそれに對してお經をあげて廻向をして貰ふ。もしそれで助かる位なら信仰などは入らない。「俺が死んだら助かるやうにお經をあげて貰うてくれ」と金を殘して置けばよい。お經をあげておかなければよい佛になれないとて、息のあるうちから、廻向料を出して置く。息のあるうちに廻向してしまへば、死んで仕向けが惡くてもよい。くだらぬことである。かうしたことが宗教といふならば、それは迷信である。眞の宗教の敵である。とまれ廻向といふのは、こつちの方から功德を集めて向ふの方へ向けることである。然るに他力廻向は廻向に他力といふ事が附いてゐるから佛の他の力によつて向ふから我々に下さることである。今無根の信といふのは私に信の根底のない伊蘭の臭い心をいふのである。心が臭くて栴檀の根のないものであるから、其の根底の臭いものに引き續いて居らない信仰を得たといふ事は、積極的に打ち出して云へば他力廻向である。阿闍世王が、我無根の信を得たりといふ事をいつたのは非常に趣が深いので、裏から申せばさういふ事になるのである。

さて阿闍世王が耆婆に連れられて釋尊の所へ行くといふ事を書いた資料の第一は『長阿含』第二は『涅槃經』——瘡を生じて後悔した事、第三の資料は(八)『阿闍世王問五逆經』である。これによると、阿闍世王は提婆に歸依をして、どうも釋尊の方は面白くない、今度釋尊の教團の比丘が托鉢に來れば門前拂ひを食はさう」と斯ういつて王舍城の門を寒いでしまふた釋尊は或る比丘に仰やつた「お前、王舍城に托鉢に行け、さうすると門衛が止めるから、止めたら大きな聲を出して阿闍世に聞えるやうに

豫言をして來い。」比丘がやつて行つた、所が「入る事は相成らぬ」といふので、そこで釋尊から云はれた豫言をした。比丘が行つて王樣に聞えるやうな大きな聲を出していふには「阿闍世王は父を殺すやうな惡い事をしてゐる。けれども、此の折に死ねば必らず地獄へ落ちる。地獄へ行くが、併乍らもう一つ善根があるから苦んだ擧句天上界に生れる。それから娑婆へ生れて來て出家して僧侶になつて遂に悟を開くに違ひない」阿闍世は之を聞いて「怒らず又喜ばず、之を信せず又疑ひ得ず。」詰り地獄へ行くのだといはれると腹が立つが、又善根があるから天上に生れて娑婆へ來て悟りを開くであらうといはれたものだから、喜ばず又怒らずといふのである。さういつて一番しまひにいふ「阿闍世王は當に無根の信を成すべし」と。夫を聞いて阿闍世は喜ばず又怒らず一寸後悔した。而して耆婆に謂ふには「本當に釋尊がかういつたのかどうか聞いて來て吳れ」そこで耆婆は直ちに釋尊の所へ行つて問ひ質した。

「彼の王阿闍世は當に無根の信を成すべし」其の次に「耆城」(耆婆の事をいふ)「諸々の男女あり、彼の一切も亦當に是趣あるべし、而して異る事ある事なし」

甚だわかり難いが斯う讀むより外はない。私は斯うやうに解釋して居る耆婆は「王樣は比丘の言つた事が心にかゝりましてお仕樣がありませんが果して世尊は左樣に仰つたかどうか」と聞きに來た。釋尊が仰せられるには「其の通りである。彼の王阿闍世は無根の信を生ずるであらう。耆婆よ、阿闍世のみならず、諸有る男女も彼等一切も亦當に此の趣あるべし。」

彼等一切も亦無根の信が出るといふ事であるに違ひない。無根の信を生じて異なる事はない。阿闍世と等しく無根の信を生ずるものがあるに違ひない。こゝに始めて小乘教の中に無根の信といふ事が出て居る。之で以つて無根の信といふ事は、大乘の『涅槃經』丈にあると思つたら小乘の經典の中に無根の信を生ずべしといふ事が釋尊の言葉として出て居る事は甚だ興味が深い。阿闍世王が自督として云つた無根の信を得たといふ事を、釋尊が既に阿闍世に對して謂れて居つた。斯ういふ事はもう我々宗

教上信仰上にとつては珍らしい事ではない。不思議ではない。阿闍世が自督を述べて「世尊、私は無根の信を得ました」といつたのは釋尊から賞ふたので、即ち阿闍世王は自分が信仰に入つて來た時には、既に其の信仰は他力廻向の信仰であるから、自督は阿闍世が賢うて云つたのではない。佛智が阿闍世にさう謂はしめたのである。だから其の自督を述べた阿闍世の機の言葉は、同時に法の上からいへば釋尊が既に「お前は無根の信を得るであらう」といはれてゐるから、實に機法一つであり、又佛凡一體である。阿闍世が無根の信を得ましたと自督を述べたのは機の方から法へ向つて申したのであり。阿闍世は無根の信を得るであらうといはれたのは法から機に向つてゐる。『涅槃經』には機の方から出てゐるし『阿闍世王問五逆經』には法の方から出て居るのである。次に慚愧問題といふ事と因果を信ずるといふ事をいつて居る。

「若し罪を覆ふ者は罪則增長す。發露慚愧すれば罪則ち消滅す。是の故に諸佛說く、智有る者は、罪を覆藏せず。善哉大王、能く因果を信じ業を信じ報を信ぜよ。」

次の文は阿闍世王が無根の信を得たと述べたのに引き續いて非常に有名な言葉である。

「阿闍世耆婆に語つて言く、(六)耆婆我今未だ死せずして已に天身を得たり短命を捨て長命を得たり。無常身を捨てゝ常身を得たり。」

之は殆んど講釋は入らぬ。非常に立派な文である。

阿闍世王の信仰告白即ち自督（自分が得た所を述べるのを自督といふ）をされた事が述べてある『涅槃經』の文の中に、本當の救濟教である所の如來の慈悲といふ事が非常に色彩が濃く描かれてある。

如來の赤子

(七)「如來一切の爲に、常に慈ある父母と作る。當に知るべし諸々の衆生は、皆如來の子なり。世尊は大慈悲。衆の爲に苦行を修する事、人の鬼魅に着かれて、狂亂の所爲多きが如し。」

之は實に救濟教の根底を說示してゐる。

「如來爲一切、常作慈父母」といふのは、「釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し我等が無上の信心を、發起せしめ玉ひけり。」といふ親鸞聖人の和讃が之と同じである。

「當レ知諸衆生　皆是如來子」といふのは『法華經』の中に

「三界は皆是れ我が有なり、衆生は我が子なり。」

といふ名高い御文と同じ意味である。

「世尊大慈悲　爲レ衆修二苦行一　如下人着二鬼魅一　狂亂多中所爲上」之は、慈悲が最高に達する時に、一つの苦行となつて現れるのである。佛の慈悲が最高調に達する時に人が惡鬼に着かれて狂亂する如く、苦行を修して人の一切の荷物を自分一人で負ふのである。私は思ふに、人間は三種に區別する事が出來る。それは一つには一番下等の人間、即ち下士は自分の荷物さへ自分で負ふ事が出來ないで人に荷物を負はせる類で、始終人の厄介になり、人に迷惑ばかりかけてゐる。中士即ち中等の人間は自分の荷物は自分で負ふ人で人の厄介にならぬ。上士即ち偉い人になると自分の荷物を自分で負ふのは無論の事、人の荷物迄も負ふのである。此頃はやる社會奉仕といふのはどういふ事かといふと、人に厄介をかけずして人の世話をするといふのが眞の社會奉仕であるが、兎もすれば自分の荷物を人に負はせて、即ち自分の義務を負はずして、或る方法で慈善事業をやつたやうに見せる、夫は此の頃、金持が成金稅をとられるので、例へば壹億圓あるとすると非常に多くの稅を取られるから其の中の何百萬圓かを寄附する。二百萬圓なら二百萬圓を寄附をすると壹億圓に充たなくなるから稅金が非常に少くてすむ。二百萬圓社會の爲に寄附したといへば結構のやうであるが、その實それ丈寄附した爲に稅金が少くなつて儲かる譯である。それでは一向社會奉仕にはならない。社會に迷惑をかけるから下士の部に屬する。

講はざるの友

救濟教主世尊

佛は『大經』の文に「荷負群生」と說かれてある。群生とは諸人、一切衆生の事で群萠ともいふ。之は萠え出る意味で、世界の人類は十五億も萠え出て居る。又澤山生れて居るから衆生、多勢の生物と同じ意味で、皆んな一切衆生の事をいつたのである。此群生を荷負するといふのは、佛は群生を負ふものである。それからして佛は亦不請の友である。請はざる友であるといふのは面白い。請うてから來て下さるのは當り前であるが、請はざるに人の友となつて行くのである。我々が佛に助けて下さいといはんのに、助けなければ置かぬといつて衆ての人を自分の責任として負ふて下さる人が即ち佛である。自分一人の責任、一家の責任、一國の責任、否全世界の責任を一人で負ふ事の出來るのが佛である。全世界の心配をして全世界の爲を思ふのが佛心である。「朝家の御爲め國民の爲めに念佛を申しあはせ給ひ候はゞ芽出度う候べし乃至世の中安穩なれ佛法廣まれと思召すべし云々」斯う謂はれた親鸞聖人も亦大きな佛心を得られた方である。大千世界、全世界を抱き擁へるのが佛心である。然らば佛ごゝろの至極はどこに行くかといへば、たゞ佛の慈悲を喜ぶといふ事は、信仰の享樂であつてその眞面目ではない。信仰は無論佛恩を喜び、自己の幸を喜び、佛前に行つては有難いと喜ぶのも信仰の德ではあるが、之はほんの餘瀝であつて信仰其の物の正しき現れではない。信仰の眞面目は即ち佛ごゝろであり、此佛心が我々の胸に加はります時に、少しなりとも他の爲に善い事をしやうといふ考が出て來るのである。『大經』の中には、佛の光明に觸れる者は善心焉に生ずといふ言葉がある。三塗勤苦の中にあつても地獄の苦みの中にあつても善心焉に生じて苦みなし……斯ういふ文句がある。善心といふのは即ちゆたかな心である。惡心はゆたかではない。彼は氣の毒である。此は同情に堪えないと、人を限るのではない。世界の一切衆生を情けを以つて抱き、世の中を助けて行く。歌や詩の生ずる心もかうしたゆたかな心から生ずる。たとひ苦みの中にあつても善心が生ずるから、世の中にかうやつて澤山に集つて居つて、苦勞の多い生活をし、樣々に苦んでをつても佛を念じ佛心にふれる時に、我々は善心を生ずる

之は私共が始終實驗する事である。如來を念ずると我が折れて、佛の力を感じてくる。だから信仰の最も面目とするものが現れて來た所が卽ち「世尊大慈悲、衆の爲に苦行を修む」で卽ち苦んで他の爲に善をなすといふ事が信仰の本當の面目である。

阿闍世王が無根の信を得ると非常に喜んだ。其の喜んだ終ひに斯ういふ事をいつて居る。

世尊若し我あきらかに能く衆生の諸々の惡心を破る事を得ば、吾は常に阿鼻地獄に在つて、無量劫に於て、諸々の衆生の爲に、無量の大苦惱を受けしむるも以つて苦となさず。

意味は世尊よ私はかういふ信仰を得て非常に喜びました。若し私が此の信念によつて衆生の惡心を破る事が出來るならば、私は地獄の中に在つて無量劫の間苦んでもそれは苦と致しません。之は阿闍世の最後の自督の言葉である。之が丁度此の文では佛の心で、世尊の大慈悲は衆の爲に狂ふが如く苦行を修めるとあるに等しい。佛心が憑くと狂ふが如く善をなす。所が我も人も殆んど狂ふが如く狂亂して罪惡を犯してゐる。

現今の日本は怒濤逆く斷崖絕壁に立つが如く實に危き狀態にある。國家は既に佛心を離れて、上も下も滔々として物質的になつて來て、實に狂ふが如く相擊ち相罵り、罪惡は天下に充ちてゐる。之に反し一旦佛ごゝろを得れば狂ふが如く善をなさずには居られない。阿闍世は非常に喜んで若し衆生の惡心を破る事が出來るならばたとひ身阿鼻地獄の中にあつても苦惱とはしないと申した。『大經』の偈文の中に有名な

假ひ身は諸の苦毒の中に止るとも、我が行は精進にして忍んで終に悔ひじ。

之が卽ち佛ごゝろである。機に法が落ちて來る時には、苦の中にあつてもそこに喜びを見出し、苦も苦とせず、他の爲に善をなすといふ心持が生じて來る。一々さういふ心持が起きなければならぬといふのではないが、さういふ心が閃いて來る、止めんとしても成さゞるを得ない事になる。それで非常に大きな事をなす人もあらう。又成したいと思ふ人もあらう。出來る丈の力を出して居る人もあらう。其の程度は自ら人に

よつて異ふけれど佛心が通うて來る時には、總て我行精進忍終不悔の心で、一切衆生は皆我が子である。世尊大慈悲、衆の爲に苦行を修すること狂ふが如しといふ此の心が現れて來る。即ち阿闍世のやうに假ひ阿鼻地獄にあつても苦とせないといつたのは法が機にうつつたのである。天上の月が地上の水に同じ影を映したのである。

斯樣にして阿闍世王は信仰上の對機の一人であるが、同時に此の人の入信は、矢張り救濟教の面目を傳へて居るので救濟教の說示の中に入れたのである。

提婆の入信

今度は阿闍世王についで、あの悲劇の中の頻婆娑羅王の事は詳しくは申さないが、韋提希夫人が見舞に行つた時分に、あそこで自督をのべてゐるし、韋提もあの通りに行つた。又其の張本人であつた阿闍世もあの通り信に入つた。最後に殘つたのは提婆達多である。この人の入信したといふ事は、私の憶測ではないかといふ人もあるが、併しどうしても私はさういふ風に思ふのである。拙著『大地の聖者』の中にも提婆の事に就いて書いて置いたが、今は少しく據の文により必ずしも私の憶說でないといふ事を申し上げたい。經文の上に於ては成程提婆は入信して居らない。地獄に墮ちてゐる。阿闍世は外護者となつて釋尊に歸依したから提婆は大檀那を失つた。五百人の弟子は、伽耶山に於いて、釋尊方の舍利弗、目連にとられてしまつた。王舍城へ行つて托鉢をするといふと人が相手にならない。誰一人として供養をしない。全く自暴自棄に陷つてしまひ、とう〳〵釋尊を殺さうと思ひ立つた。釋尊が耆闍崛山の中腹をお通りになる時、提婆は上から大石を轉がし落した。運よくお體にあたらず母指だけ傷つい て血が出たのみであつた。提婆としては殆んど自力のゆきつく所へゆきついて仕舞つた。

(九) 提婆達兜、重病を得たり。諸々の弟子に告ぐ。我此の力なし、往いて沙門瞿曇を見る事を得しめよ。汝等、我を扶けて沙門の所に至るべし。其時提婆達兜、毒を以つ

て十指の爪甲に塗り諸弟子に語る、我を輿かきて彼の沙門の所に到れ。」

之は禮拜をする時に、頭を以つて釋尊の足を毒指で掻かうとしたのである。さうして行つた。それを見て阿難がいふには「提婆が輿に乘つて來たが大方懺悔に來たのであらう」といふと世尊は「さうではない」と仰やつた。之を又緬甸佛傳の方で見ると、提婆は病氣に罹らない。そして釋尊に會ひたいといつてやつて來た。比丘達は驚き恐れて、「今迄何べんも釋尊を殺さうとしたから今度は愈々本人が殺しに來た」といつて騷ぎ立てた。釋尊は靜かに「騷ぐな、今日提婆は我の顏を見る事は出來ないであらう。」といはれた。提婆は祇園精舍に行き、水溜りがあつたので、足を洗ふ積りか、其處迄來ると、俄かに大地が凹んで來た、凹んで來るとそこから大火炎が燃え出した。さうして大きな金挺子が現れて提婆を挾んだまゝ、じつと大地に引き込んだといふのである。

「提婆達兜、適々足を下して地にあり、其の時、地の中に大火風あつて生起し、提婆達多の身を燒く、爾の時提婆達兜、火に燒かれて悔心を發す。如來所に於て正に南無佛を稱えんと欲して然も究竟せず、南無と稱して便ち地獄に入る。」

提婆達多が墮獄したといふ事は、あの支那の法顯三藏が、提婆達多が死んでから八百年ばかりの頃、祇園精舍に巡禮した時に大きな穴があつた。之れ提婆が無間地獄へ墮ちた穴であるといふ風に傳へられてあると書いてあるが、併し私は例の精神上の事を物質の上に象徵したのであつて、生き乍ら提婆が地獄へ墮ちたといふ此の文句は、此の文の如く考へるのではなくして、信仰生活には入つたと考へるのである。何故そんな大膽な事が云へるかといふと、提婆が火の爲に燒かれて地獄へ墮ち入つた。墮ち入つた時に南無佛といはふとして、南無といつて地獄へ入つたといふことは、信仰上非常に面白い事であると思ふ。本當に地獄を經驗するのは、信仰生活に入る時である。信の生れる時地獄は生れる。

地獄一定、往生一定

信に入る時に地獄を經驗するのである。地獄一定と往生一定は裏表である必墮無間の徒ら者といふ事を眞に感じた時、其の時に往生するのである。必墮無間と信ずるのは、佛の光に觸れた時で、即ち地獄の精神的成就を意味するのである。佛の光を感じなければ地獄の意義はわからぬ。之は實に宗教上の神秘であつて地獄へ行くといふ事は死んでから行くやうであるが實はこゝにあつて地獄を認め、地獄を味ふのである。……之が信仰上の事實である。其の時分に、久遠劫來からの自我が破壞され、地獄行きといふ事を實感するのである。自分は、もう地獄へ行かなければならぬ奴であるといふ事を信ずる、其の信ずる時に如來を信ずる、佛心が出て下さるのである。地獄行きと信ずるのは佛ごゝろである。即ち地獄行きと信ずる信は光であるから、言ひ換へれば本當の光に照らされて信ずるといふ事が、機に來れば地獄の焰の中へ行くものであるといふ實感となる。必墮無間と信ずる時にそれが棄られずに救濟せられるのである。從つて其の人には地獄が實現すると思ふ。それで提婆は釋尊に向つて十指爪に毒を塗つて掻き殺して終といふ最後の我が（即ち提婆は我の權化で是まで釋尊に反抗し來つたのであるが、此に掻きついて殺さうとする煩惱の最高の時に）俄然として高塔と碎けた。それを忽然として大地に火が燃え上つたと象徵したので、釋尊に最後の惡毒を濺がうとした瞬間に、久遠劫來の我が根柢的に轉覆つた。夫は實に神秘で凡慮の計ひを許さぬ。人間の義が最高に達してさうして一番最後の所に轉覆る。痲病をやつた人の話を聞くと痲毒が殘らずに出て來なければ治されぬといふ。提婆はあらん限りの「我」毒をいだして如來に掻きつかうといふ、その最後の毒が出た時に、提婆は忽然として救はれたのである。此の『阿含經』の文はよく信仰上の神秘を象徵してゐると思ふ。之は一體、提婆が生き乍ら、火炎を生じて地獄へ墮ちたといふ事は實に神秘的であつて、たゞ神秘だといふ事丈では意味をなさぬ。そんな事なら何故、提婆が稱南無佛、南無丈で濟んでしまつたか、實に此の經文を書いた人は憎い位、よく書いて居る。實に「南無」である。南無は歸命、歸命は全身を投げ出した心である。提婆

が「南無」といふ事をいつて「佛」といふ暇がなくて地獄へ沈んでしまふた。之でよろしい此際「佛」といふを待たぬ。南無丈でよい。眞宗では、南無と阿彌陀佛は不離であるといつて、南無は何かといへば阿彌陀佛に南無するのである。これは信仰の端的を表はす、南無と叫ぶ所に阿彌陀佛はある。「彌陀の誓願不思議に助けられまゐらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛申さんと思ひ立つ心のおこる時、即ち攝取不捨の利益にあづけしめ給ふなり」である南無といふのは、思ひ立つ心の起る時、信仰の端的をいふ。「誓願不思議に助けられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて念佛申さんと思ひ立つ心の起る時」南無阿彌陀佛と口に出ない所に攝取不捨にあづかるといふ、際ざい說示である。南無佛といはふとして佛と申さず、南無と口にいつた、『增一阿含經』の記者は「提婆が「南無佛無佛」を稱えんと欲して究竟せず」稱え得ないで、南無と稱し得て即ち地獄に入ると書いたのは、地獄に入つた時が極樂に入つた時である。地獄を經驗する時は信仰を得る時である。地獄一定すると同時に極樂往生一定と救はれるのである。本當の信仰のない人には地獄の實驗は出來ない。我々が佛を信ずる時始めて地獄一定を實驗する。豫想上單なる恐怖地獄は無意義である。佛を信じ得た時に地獄一定、とても救はれないと實感する。併し佛を信じて居るから助けられるといふ事は間違ひない悲觀の極に地獄を見透す事が出來る。暗い所を見透す事の出來るのは佛心である。普通の人は人の惡い事は見るが、自分の惡い事は見ない。佛法を信ずるやうになると、人よりは自分の暗い所を餘計に認めるやうになつて來る。自分自らが焰に充ち滿ちてゐる恐しい地獄を見る事が出來るのは佛を信ずるからである。信仰上面白い有難い際ざい處である。

往生の先達

自覺敎の自力の提婆は、三十年間道を修めてさうして非常に偉い大先達であつた。其の提婆が自覺の蹉き、失敗し大逆罪者となり、遂に自覺敎を拋擲して終に救濟敎の人になり終つた。親鸞聖人も矢張り提婆は佛の化身と言つて居られる。

提婆は茲に初めて他力信仰に入つた。韋提希夫人と同樣に自覺教には救はれない人であつた。提婆は「我」のかたまりである。然るに此の我が打ち折れて他力廻向の直觀によつて、我慢、我執の感情が根柢を失はれた。良に往生の先達としての提婆は吾々にとつてよき善智識である。眞に自分を反省する人は、何人も佛に反抗して血を流がせ奉る恐ろしい我念を經驗するであらう。韋提は婦人としてあの境遇を代表して居り、又提婆は我慢我執の我をごこ迄も振り立つて行く強い所は、男子を遺憾なく代表してゐる。其の意味に於て私は信仰の實驗から提婆は必らず信仰生活に入つたと信ずるのである。

之は決して私の憶說でない事は次の文をみればやゝ私の說を證據立てると思ふ。『增一阿含經』第四十七に曰く

(十)佛阿難に告げ給はく、(提婆は阿難の兄である。說は色々あるが、提が死んだ時に、阿難は悲んで泣いて居るから、自分は本當の兄であらうと思ふ。)彈指の頃(日本ではやらないが、彈指といふのは、指を彈く、錫蘭あたりでは盛んに之をやるが非常によい音をさせる、又人の家を訪問する時に彈指する)善い意を發すも、其の福喩え難し。何に況んや提婆達多は、古に博く今に明にして誦習する所多し。昔怨讐とせられて殺害の心を起して如來に向ふ、復、曩昔の緣報に由るが故に喜悅の心ありて如來に向ふ。最後命終の時、和悅の心を起し、南無と稱ふるが故に、辟支佛と作りて號して「南無」と曰はん。

之は後で釋尊が阿難に向つて、彈指の間の善意でも其の福と云ものは喩え難いものである、何に況んや提婆は古に廣く今に明らかにして修養ある偉い人であつた。昔は怨讐になつて殺害の心を起して如來に向ふた。けれども人格の高い人であるからしてあれも辟支佛になる(辟支佛は獨覺であるが、獨りで覺る、師匠なくして覺る)其の辟支佛になつて名も南無といふ名前であると語られたと云のであるが、斯ういふ經文は一々細かに解釋する必要はない。信仰上の事はいつも音樂か味ひで表はすやうなもの

であるからである。長く云つてゐても中味は何處にあるかといふことを見れば宜しい。即ちこゝにも釋尊は矢張り提婆を肯定して居られる。長く書いてあるが一念の善心の表象と見たらよい。一念の信仰であるのである。

一念の信心

一念といふものは短い事は短いが、信仰の一念といふものは此の間に時間空間を攝めてしまふ。此の一念といふものは實に神秘である。人間世間に謂ふ時計の刻む時間ではない。我々の世界では一念は短いといふ事を表象して居る。短くとも效能があるから、如何に效能があるかを表象して居る。其の意味に於て我々人間世界に於て、短い一念といふものに非常な功德があるといふ事は信仰の一つの特質を表はして居る。信仰は十念かゝらなければならぬといふのではない、一念の間でも偉大なる力を出す事が出來る。都合のよい特權があるのである。一念は微なる我々の考へてゐる一念ではない。「此の心擴大にして法界を攝め、この心高遠にして未來際を盡す」といふ『安樂集』に有名な文がある。此の一念の信心といふものは、廣大にして廣く大きく、全法界を攝め、其の心は時間的に謂へば、長遠にして未來際を盡す。一念の信心といふものは竪に未來際を盡し橫に十方を攝め法界を覆ふものである。是が他力廻向の信である。

次に目連尊者が神通を以て、上の釋尊の提婆得脫の豫言を知らせうと思うて、地獄の焰を掻き分けて行くと洞炎空に漲卷いて居る無間地獄の釜底から、提婆は「紫雲の棚引くやうに光り耀く者は何人なるぞ」目連尊者は「我は釋尊の使目連なり」「よく斯ういふ所へ來て吳れた」と提婆は感謝する。目連尊者は釋尊が今日仰やつた事を提婆に告げた。

(十一)「提婆斯の語を聞き已つて歡喜踊躍し善心生ず。復目連に白す、「如來の所說言敎必然にして疑はず群生を愍み給ふ、濟ふ所無量なり、大慈大悲兼て愚惑を化す、今日右脇を以て阿鼻地獄中に臥し一劫を經歷すとも心意專正にして終に勞倦なし。」

阿闍世王は信の自督の一番終ひに「世尊私は一切衆生の諸々の惡心を破る事が出來ますれば、阿鼻地獄にあつて無量刼を經て大苦惱を受けても以つて苦しみと致しませぬ」といつて居り提婆は亦信仰を得た時に喜んで「愚惑を助ける事が出來れば右の脇を下にして阿鼻地獄の中に一刼の間居つても少しも厭ふ事はないといつて居る事は實に信仰の極致、符節を合せたやうなものである。そして一念の信仰の生きた註釋であると信ずる。かくて、韋提夫人も阿闍世も頻婆娑羅王も提婆も皆等しく救濟教の對機として即ち釋尊の說かれた大慈大悲の教によつて信仰の人となり、救濟され終つたのである。

實に救濟教の對機は五逆罪の人々、又はその犧牲者であつた。そしてそのまゝ全人類の代表者でないか。如來の大誓願は是等の逆惡を轉じて功德となし瓦礫を變じて金となし給ふ。親鸞聖人宣給はく

唯除五逆誹謗正法といふは唯除はたゞのぞくといふことばなり。五逆の罪人をきらひ謗法のおもきとがを知らせんとなり。この二つの罪の重きことを知らしめて、十方一切の衆生みなもれず往生すべきと知らせんとなり。——親鸞聖人『銘文』——

註

(一) 『阿含の佛教』第三七六頁參照

(二) 有二白法一能救二衆生一慚二愧

(三) 唯願大王速往二佛所一除二佛世尊一餘無レ能レ救我今愍レ汝故相勸導、爾時大王聞二是語一已心懷二怖懼一擧レ身戰慄五體掉動如二芭蕉樹一仰而答曰天爲二是誰一不レ現二色像一而但有レ聲、大王吾是汝父頻婆娑羅汝今當隨二耆婆所說一莫レ隨二耶見六臣之言一時王聞已悶絕——南本涅槃第十七——

(四) 耆婆答言譬一人而有二七子一是七子中一子遇二病父母之心非レ不平等一然於二罪一者心則偏重如來亦爾於二諸衆生一非二不平等一然於二罪一者一心則偏重於二放逸一者佛則慈念不放逸者心則放捨——南本涅槃第十八——

(五) 世尊、我見二世間一從二伊蘭子一生二伊蘭樹一不レ見下伊蘭生二栴檀樹一者上我今始見下從二伊蘭子一生中栴檀樹一伊蘭子者我身是也　栴檀樹者卽是我心無根信也——同　上——

(六) 阿闍世王語二耆婆一言、耆婆我今未レ死已得二天身一捨二於短命一而得二長命一捨二無常身一而得二常身一——同　上——

(七) 如來爲二一切一　常作二慈父母一　當レ知諸衆生　皆是如來子
世尊大慈悲　爲レ衆修二苦行一　如下人着二鬼魅一　狂亂多中所爲上
——同　上——

(八) 彼王阿闍世當成二無根信一者域諸有男女彼一切亦當レ有二是起一而無レ有レ異　(阿闍世王問五逆經)

(九) 提婆達兜得二重病一告二諸弟子一　我無二此力一得往見二沙門瞿曇一汝等當扶レ我　至二沙門所一　爾時提婆達兜以レ毒塗二十指爪甲一語二諸弟子一汝等與我到二彼沙門所一

……

提婆達兜適下レ足在レ地爾時有二地中一大火風起生燒二提婆達兜身一爾時提婆達兜爲レ火所レ燒發二悔心一於二如來所一正欲レ稱二南無佛一然不二究竟一得レ稱二南無一便入二地獄一

(十) 佛告二阿難一彈指之頃　發二善意一其福難レ喩何況提婆達兜博レ古明レ今多レ所二誦習一……昔所怨讐一起二殺害心一向二於如來一　復由二曩昔緣報一故有二喜悅心一向二於如來一……最後命終之時起二和悅心一稱二南無一故後作二辟支佛一號名曰二南無一

(十一) 提婆聞二斯語一已歡喜踊躍善心生焉復白二目連一　如來所說言教必然不レ疑慇二念群生一所レ濟無量大慈大慈衆化二愚惑一　設我今日以二右脇一臥二阿鼻地中一經二歷一劫一心意正專終無二勞倦一

(以上增一阿含經第四十四)

第五講　救濟教主世尊

救濟教主としての釋尊を知ることによりて私は信仰上一つの根底を見出したのである。

教祖の見方

一宗教に就いて、後世の信者がその教祖をいかに見るかといふことによりて、其宗教の死生の別れめとなる。此方面から云へば佛教に於いては、隨分後代の佛徒が長い間誤謬を續けて來たと思はれる。基督教にあつてもキリスト死後數百年の間、隨分基督の身論が起つた。それは即ち基督は神の子であるといふことに就いて、基督の神的方面を多くいふか云はぬかといふことである。それに對し終始一貫正統派は基督を肉の苦みを持つてゐる人間であるといふ方面を固執した。そして夫が今日まで基督が死なずにゐる所以である。佛教の方になると北方佛教即ち支那、日本へ傳つて來た佛教

では何時の間にやら釋尊を金ヒカの佛になした。釋尊は殆んど肉や血は持つて居らない、此の世の人でない天上の人であるといふやうな風に考へて來た。夫がために釋尊像なども大概美しい端嚴な金色に塗られてある。即ち到底人間と互に手を携へるといふやうな味がなくなつて來たのである。それがなくなつて來て、釋尊は殆んど人格的感化を失つた。他力教の方だとて何も釋尊をさういふ佛として片附けなければならぬ必要はない。否、自力他力といふやうな望を離れ、釋尊を偉大なる宗教的人格者と仰ぐにしても、矢張り此世の人である以上は、我々と同じやうに難儀や苦みを持つて、同じやうに苦みになつたといふのでなければならぬ。然るに何時の間にやら夫はなくなつてしまつた。之れ多くは私の所謂自覺教の色彩が強く出て、さういふお方は如何にも塵の世を超脫した、人生から脫け出てゐる、持戒堅固な少しも人間味のないやうに祭り上げたのである。併し又之と反對に極端に人間味を出さうとすると、釋尊をもつて常人と變らぬものとせねばならぬと考へるやうになる。是も間違ひである。吾々はいつも此の二邊に墮やうとする。併し釋尊といふ御方は後者の誤りに陷る人でないが、前者の誤りに導き安い方である。夫は何んといつても、釋尊の御人格が人に勝れて完成せられてあつたからである。

是は釋尊のみならず、總ての聖者に對して我々凡夫が崇拜する時多くの場合、一方の光明の方面丈を見て、其の聖者達が他の人間味の一面を持つて居られることを見る事が出來ない。本當の聖者の內面を觀察する事は出來にくいから外部を崇拜する。外部も殊に歷史的に見ると人に勝れた點丈が記載されるから、其の聖者は誠に光明赫奕とした方面丈を殘して來る。其れが爲に聖者を崇拜する事は結構であるが、唯敬遠主義をとつてしまふて自己と聖者が一つになる事が出來ない。本當の意味で手を携へる事が出來なくなるのである。殊に釋尊にありては基督や孔子なゞゝ違ひ、すべてが圓滿で何んとなう地上の人でないやうな點が非常に多い。孔子などは人間としては實に偉い人で人類の生んだ者、地上の人としては恐らく孔子程偉い人はあるまい。音樂が

非常に好きで、詩經を編んだり。晩年になると易の哲理に耽り韋編三度絕つと傳へられ『春秋』を作りて、嚴正な歷史的批判を述べ、生活の典型としては『論語』の發表となり、そして一方には政治家、經世家である。若しも彼をして宰相とするならば、四百餘州に堯舜の治を致したのであらう。基督は天才的の人で、年若くして三年間傳道して死んだので、その教へと人格は若い人をひきつける力があるけれども、ごうも人生の深い惱み『我』の執攝や執着の強い人性の深淵を照し得ぬ所がある。たゞ非常に詩人的、天才的の人で色々奇拔な事はいつてあるが、人生の種々相を深くかみしめる點からいへば、少なからぬ物足らなさを覺える。それにひきかへ、釋尊は孔子のやうな直接政治的に携はることもなされず、基督に比すれば三十五の時から八十迄四十五年間傳道して居られた二十九の時迄は王宮に在つて人生の味は充分味はれた人である。澤山の女に取り卷かれて歡樂を盡され、人生の酸いも甘いも食ひぬけてから出家されたので、無論御妃も御子さんもあつた。けれども基督はさういふ味は殆んど知らなかつた。然るに釋尊はさういふ家庭生活の後六年間苦行して悟を開き、その後四十五年間といふものは、云はゞ大きな巡回大學を立てゝ二千何百人の弟子を連れた大傳道者であつた。大說教者であり又大教育者でもあつたから人間の產んだ者としては恐く釋尊より偉大なる人はどう考へてもなささうである。實に孔子、釋尊といふものは人間の產んだ者の中の兩大關であると思ふ。さういふ人であるから後の崇拜者が尊敬を拂つて、南無大恩教主釋迦如來と拜み、現身佛として崇拜したのは尤もである。併し矢鱈に釋尊を聖者として崇拜して仕舞ふといふ事になると前述のやうに折角の釋尊の本當の所がわかり難いのである。

迷ふて迷はぬところ

人生は始終、現實といふものを離れてはいかんので、之が最も大事である。所が多くの哲學者、宗教家は、自然、現實を離れた聖者になる。どんな事をいつても、決して心配しない。人が悲む時にも自分は笑ふ早くも人生を卒業してしまつて善人となり

聖者になる。さうでなければいかんやうに思うてゐる。苦みの中にありてそれを斷ちきらない。斷ち切つて而も斷らないのである。かやうに本當の悟りは、悟て悟らず、迷うて迷はぬ所にある。どこ迄も現實味といふものを殘し、即ちどこ迄も人間味といふものがなければ、本當の人生を味つた人とは謂へぬのである。であるから禪宗などでよい師家になると弟子が生中悟り澄すと又迷はすといふ宗教は迷の中に悟りを見、悟りの中に迷を見、何處迄も人間味を失はない所に生きる。而も人間味に負けないで、此の人間味を淨化し材料として不斷に自覺の光を輝やしてゆくのである。であるから人間味は根抵的の材料である。謂はゞ炭のやうなものである。人間味の炭へ自覺即ち宗教の火がついて燃え上る。素材の炭が亡くなつた時に悟りの火も亦消えて終ふ。人間味があればこそ悟りの火が燃え上るし炭があればこそ火が燃え上る。それをたゞ火丈見るものが多いのだ。焉んぞ知らん、聖者が聖者としての面目を表はすのは黒い炭が始終あつて其れが赤くなつて燃え上つて居るのである。之が宗教の眞面目である。

それで宗教に入つた人は、何の方面の人でも、自分の職業に就て其の人々相應の天地の上に自覺の光、信仰の光といふものを耀かす事が出來るのである。之が喧しく謂はれる、「汝等の行ずる所、是皆菩薩の道」で自分のやつて居る仕事其の儘が菩薩の道になつて行くのである。即ち佛の道になつて行くのである。蓮如上人は「商ひもし奉公をもし、獵漁をもせよ」何でもよい、どういふ職業でもよい、信の火は其の素材に着いて燃え上る。男でも女でも變つた事はない。あらゆる人は皆んなかういふ靈の光をあげる事が出來る。

救濟教の開顯

之を釋尊の上に味つて見る、即ちどのやうに救濟教を開顯せられたか。自覺教の釋尊は云はゞ大學の總長であるとすれば家庭宗教の教主として釋尊はどのやうであつたか、否寧ろ混濁なる人生に飛び込んで衆生を濟度された釋尊がはんとうの釋尊の眞面目を表はしてゐるのでなからうか。その方面の釋尊を見るといふ事は面白いであるま

いか。第一王舍城の韋提はあゝいふ境遇に陷つて居た時に、釋尊は何を說かれたか。釋尊の說かれたものは「佛心者大慈悲」である。佛は大慈悲であるといふ事を始終說かれたのである。女の人は道理や理窟で行けぬ、だから釋尊は徒らに愚痴を叱り給はず、冷かな道理を離れた、暖かい如來の慈悲を說かれた。牢屋に入つて心が冷くなつて居た時に、暖い慈悲を說いて下つたのである。之が救濟教の面目である。救濟教のさういふ信仰は靈鷲山（耆闍崛山）からではない、其の山を下りて、王舍城の血まみれ騷ぎの家庭、混濁の人生の中に入つて何等、戒も禪定も智惠も說かずして、たゞ佛の慈悲を信ずる外はないのであるといふ事を說かれたのである。さうした釋尊は亦決して冷かな人でなくして、誠にやさしい暖かな慈悲同情を持つて居られた釋尊でなければならぬ。光顏巍々として光り耀く釋尊であるといふよりも、汚い人間の住んで居る荒家に入つて重病人を訪問する所の御醫者の態度であらせられたに相違ない。前に病比丘を看病されたといふ話を申したがあれが救濟教主としての釋尊の眞面目であらせられる。

丁度、產婆が子供を產むことを助ける如く、釋尊は一面靈の事を產ましむる產婆であつた。そして產室は常に穢い、苦しい陣痛からして光の子供が生れるのである、苦しき陣痛と穢い產室の中から人生の次の時代を飾りつくべき所の子供が生れて來る。信仰の光の子を韋提が生む時には、暗い天日に背いた冷い牢獄の中であつた。そして釋尊は亦その汚れた淺間しい家庭の鬪爭の中に飛び込んで、淺間しい人生々活を淺間しいと捨て給はず滿腔の同情をもつて、救濟の道を說かれた。之が救濟教主としての釋尊の教團の比丘を教養される釋尊に對して面目を異にする所で、人情の機微を嚙みしめて、何を韋提は苦んで居るか惱んで居るか、其の苦惱のある所を深く究めて、それには因果を信ずればよい、冷かな因果に吾々が縛られてある。其の因果の繫を切るのは何であるかといへば、如來の慈悲、信念によつて切る事が出來るといふやうに、女の愚痴の腹底へ飛び込んで佛の慈悲を說かれる、そこに救濟教の面目が躍如として

あるのである。是は私の想像であるが違はない想像であらうと思ふ。一體人間味のない人が人間の最後の痛苦を救ひうるものでないからして、獄中の韋提夫人の煩惱の奥底迄も同情を表されて、愚痴から起つた詰らぬ事迄にも同情を表して行かれたことを他の方面から證據立てゝ見やうと思ふ。

それを見るによい機會は實に釋尊の故國なる迦毘羅衛國と舍衛城に起つた悲劇を見るにある。前講の通り釋尊の當時の政治の中心は舍衛城と王舍城であつた。前には王舍城に悲劇が起り、韋提夫人の幽閉があつたが、今度は舍衛城に一つの悲劇が起つた。前の王舍城の悲劇が釋尊が一番に心配になつたのは提婆である。彼は釋尊とは從弟に當り、その反抗の爲めに敎團は非常に動搖し、大外護者たる頻王は殺された程である けれども、釋尊は提婆を赦して、「提婆を見る事猶羅喉羅の如し」といつてゐられる。羅喉羅は釋尊の子である。併乍ら王舍城の悲劇に就いて、釋尊はまだ肉親の破綻を經驗せられない。所が舍衛城の悲劇は釋尊其自身の上に、もつと大きな打擊が來たのである。

末利夫人と瑠璃太子

釋尊が成道の始め即ち、其の悲劇の起る二十年ばかり前。舍衛城、波斯匿王が迦毘羅城に結婚を申し込んだ。所が釋迦種族といふのは種族が非常によいので、舍衛城は云はゞ成金である。迦毘羅城は系統の正しい立派な國であるが、國が小さいので始終此の成金國に壓迫されて居るけれども、種族の誇をもつてゐる迦城の人々は容易に此の申込に應じ得ない。波斯匿王は第一夫人をお前の方から迎へたいといつて來た。當り前ならば大國からの所望故大いに喜ばねばならぬが、どうも種族が惡いから面白くない。其の時に釋尊が出家されたので甥の摩訶男といふが、迦毘羅城の主になつて居た。「摩訶男の婢の娘を波斯匿王の第一夫人となす」『增一阿含』の第二十六にさう書いてある。摩訶男の婢の娘、即ち摩訶男の腰元の卑しい身分の娘を、波斯匿王の第一夫人とした。それが末利夫人であると云事はわからないが——『增一阿含』ではわから

ぬが後に末利夫人といふ事が證據づけられる。兎も角も摩訶男は自分の腰元に綺麗な娘があるから、それを「私の娘だ」と詐つて波斯匿王にやつた。そこの間に生れたのが瑠璃太子である。さて瑠璃太子は始めて十二三の時お母さんの里の迦毘羅城へやつて來た。そして其處らを遊んで歩いた。所が其の時に迦毘羅城の人達は立派な御殿を造り其は釋尊を一番初めに招待するつもりであつたが、子供は無邪氣なものであるから、瑠璃太子は其の御殿の二階に遊び廻つた。其れを見て、迦城の人々はさういふ下等な種族の娘から生れた者が、結構な御殿に上つたといふ事は非常に怪しからぬといつて、可哀さうに頑是ない子供を恥めて擲つたり叩いたりして追ひ返した。舍衛城の悲劇はそこから源を發してゐる。瑠璃太子が十七になつてから、印度敎の梵士で拘瑳婆羅門が提婆の代りをして、瑠璃太子を大いに煽てあげた。「一體、王者たる身として、あれ丈の侮辱を受けて、默つて居るなら、舍衛城なるものは全く國家の權威を失つて了ふ。一つやつたらどうか」といふ事を瑠璃太子に言ふた。弱年ながら、瑠璃太

子は宿怨を霽さうといふので愈々兵を起した。其の時丁度、波斯匿王は末利夫人——聖德太子の講釋された「勝鬘經」の勝鬘夫人のお母さんである、勝鬘と瑠璃は兄弟なのである——とゝもに城から少し離れた祇園精舍に說敎を聞いてをられた。其の間に兵を起したのである。王は五百人の守衛兵を連れて居たがお寺であるから中へは入れず外に居る。其の隙に祇園精舍を圍んで城外に居る五百人の兵隊を皆殺しにし、瑠璃太子は王位を簒奪した。そして自分が舍衛城の王であると名乘つた。波斯匿王と末利夫人は吃驚りして出て見ると死骸の山を築いてゐる。ウロ〳〵して居ると生きのびた近臣が二人あつて末利夫人は波斯匿王を連れて親子の事であるといふので舍衛城へ歸つて行つた所が、守門の兵は王樣を中へ入れない。仕方がなく其處を逃げた。

(一)「末利夫人曰く、幸に愁憤する勿れ。共に俱に逝いて我父の國に還らむ、即ち進み發て七日七夜にして迦維羅衛兜薩衆に到る」『佛說瑠璃王經』城へ歸る事が出來ないので、波斯匿王は非常に驚き恐れ、自分の思ひがけなく子の爲に位を奪れて行く所

がないので困てをられると、末利夫人は懇ろに王を慰め、どうぞ御心遣ひなさいますな、私の父の國へ一所にまゐりませうと連れ立つて出掛けた。こうした大事變に處しても夫人の取り亂さない態度が簡潔な文書をして通じて容易に知ることが出來る。こうして又此文書によりて末利夫人が摩訶男の腰元の娘で瑠璃太子の本當の母であるといふ事もわかるのである。史料としては非常に面白い。さうして父の城へ行つたけれども、俄かに舍衛國の王樣と皇后がたつた二人で七日七夜も、嘗つて大地を踏だ事のない人が步いて悄然として行くなどはない事であるから門番は入れない。仕方がないので、水溜りの中で、菜葉などを洗ふたり洗濯をする所に行つて迷羅葡（胡羅蔔、午蒡見たやうなもの）を食べた。所が腹が膨れて腹痛を起して死んでしまふた。末利夫人は唯泣くのみであつた。その中に王、后の蒙塵のことがわかり迦毘羅城で厚く葬つた。それから末利夫人はどうなつたか、記錄には殘つて居ない。

宿業は覆ひ得ず

そこで一方瑠璃太子は父王を城から追つぱらつてしまひ愈々迦維羅城を滅してしまふといふので、拘薩梵士の敎唆に從ひ大軍を引き卒れて祇園精舍の傍らを通つて迦毘羅城に向ふ。其の時に目連尊者は、釋尊の前に進み出で「愈々迦毘羅城は全滅に近きました。神通を以て、大軍を粉微塵に打ち挫いてしまひませうか」時に釋尊はかやうに仰せられた。

(二)「空をして地となさしめんと欲し、復た地をして空たらしめんと欲すとも、本緣の繫ぐ所、此の緣腐敗せず」

假しお前に大きな神通があつても、本緣のつなぐ所宿業の絆はどうする事も出來ない。此の緣腐敗せず、腐れる事はない。目連は重ねて「それならば迦毘羅城に金網をはりて敵の矢を防ぎませうか」すると釋尊は「業報に金網をはる事が出來るか」といはれた。目連尊者は仕方がないから悄然として退いた。

之は注意を要する事で、神通といふ事は、人爲の力、人間の出來る事の最高を現し

たもので、飛行機が飛ぶ、潜航艇をつくる、あれも一種の神通である。あゝいふ人間の力の最高を盡しても、業報から出る結果をどうする事も出來ない。ちやうどいかに醫術が發達しても死ぬる事丈はいかに人爲を盡しても仕方がないやうなもので因果の道理によつて出て來ることは人間の力で免る事は出來ない。そこを現はしてゐる。是が現實界の約束である。宗教の力、即ち神通をもつてしても現實といふものを根本的に變へる事は出來ない。矢張り宿業に左右せられる。親鸞聖人は「宿業があれば人を千人殺すかも知れぬ。併し若此の業がなかつたなら、一人をも殺す事は出來ない」といはれた。人間には業報があつて、十人は十人乍ら顏貌の違ふのは先天的の業によつたので後天的努力ではどうしても變へる事は出來ない。老病死の三つに對しても其通りである。今瑠璃太子が大軍を以て迦毘維城を全滅するのは宿業の催す處である。始め結婚の時の詐りが其遠因である。其後新築の御殿へ上つて辱しめを受けたことが近因である。梵士の煽動には動きの取れない根柢を若い太子にもつてゐる。所謂本緣の繫ぐ所で、尤もな次第である。

宗教が現實の約束を離れられないといふのは是である。よく宗教を信じて、儀式を行ひ祈禱をすれば重病が癒るといふが、宗教はそんなことをするのが決して所詮でない。現實は業に從つて推して行くので何の力も止める事は出來ない、或は幾分緩和する事は出來やう、又或る場合には方向を轉換する事も出來やう、併乍ら一から十迄宗教の力をもつて現實を改造し改善する事は出來ないといふ事を意味して居ると思ふ。

親族の樹蔭は涼し

目連は仕方がないから悄然として退いたといへばさうではない。瑠璃太子は暑い日に大軍を引き連れて祇園の傍に來ると、枯木の下にゐんで居る者がある。誰かと視ると釋尊である。そこで瑠璃太子は子供の時から教つて居るから素通りは出來ない。之で見ても如何に釋尊の德が高かつたかといふ事がわかる。釋尊の本國を殲滅しに行く途中、本國から出た釋尊が枯木の下に居られるので

素通りが出來ないから先づ馬を下りて挨拶を申上げ「世尊よ、あそこには立派な林があるのに、何で此の枯木の下に立ち給ふや」世尊答へて、

(三)親族の蔭涼し、釋種は佛より出づ、盡く是れ我が枝葉、故に此の樹の下に座す。

こゝに釋尊の全力をあげての事の進行に對する防止が見られる。しかも大軍をやることを止め、又はやめよとは仰やらない。釋尊が枯木の蔭に立つてゐられるから質問をした。その時に親族の蔭は涼しい、迦毘城は枯木のやうなものである。そこらに綺麗なこんもりとした木はあるが、そこには立たぬ。迦毘羅城は枯木になつてしまつたけれども釋尊の枝葉である、だから尚此の木の下に立つといはれた。

釋尊は無論三界の大導師であつて人生を超脱し、怨もなければ親もない。一切衆生は是れ我が子である、敵も味方も親族も何もないといふ一面をもつてゐられる。けれども迦毘羅城の全滅の時には「我が枝葉だ」と全力をあげて庇護をして居られる。どうした所に釋尊は此戰爭を止めることは出來ないことは知つてをられる。これは偶然に起るのではなくして起る理由があつて起るのである。而も止める事は出來ないと承知して居つて而も止められる。

此の所が妙味のある所と思ふ。人生には始終悶えと惱みがある。鬪爭がある。常に動搖し常に變つてゐる。大きい小さいの別こそあれ種々の戰爭が起つて居る。根本的に止める事は出來ない。之を根本的に止めると人生はなくなつてしまふ。人生は遂に素材である。材料の炭さへあれば何時でも火は燃えつく、云はゞ學校のやうなもので必ず一定の年時が要せられる。此間は素材が彫琢をふる時である。能力に係らず、入學すると卒業するといふことでは學校の意味をなさない。人生もさうだ、かやうにして釋尊は三度止められた。それ度毎に瑠璃太子は釋尊の德化によりて何んとなく軍を返した。併し城へ歸つて見ると、なんだか訛かされたやうな氣がして又瞋りの火が燃え、更にまた軍を進めた。釋尊は遂に止められなかつた間もなく太子の軍は迦城を圍み烈しい攻擊が行はれた。其の戰爭の記事は詳しく『增一阿含經』に記載せられてあ

る。

耶舍といふ青年が非常に勇敢に奮戰し、城の中から百發の矢を放ち、敵軍は備へを亂して退いた。瑠璃太子の軍は少からずたぢろいた。摩訶男は又非常に偉い人で、此の時耶舍に向つて「無益な殺生することは要らぬ。鎌を拔いて射るがよい」と命じたので耶舍は命に隨はざるを得なかつた。

そこで太子の軍はどつと推し寄せて來たので耶舍は刀を拔いて軍勢の中へ斬り込み圍みを破つて逃れた。大軍は城に放め入り男は殺し女は虜にした。釋種の或る婦人は我が身を汚さうとする瑠璃太子を面罵した。殘虐は文字通りに行はれ、殆んど慘にする勢ひであつた。摩訶男は瑠璃太子に「かう澤山の人を殺すのは見るに忍びない、どうか私が堀の中へ飛び込んで浮み上るまで、人を殺すのを休めて呉れ」とたのんだ。すると太子は僅かの時間であると、願ひを許した。摩訶男は大きな石を抱いて堀の中へ飛び込み遂に浮なかつた。浮み上る迄殺すなといふ事であつたので、太子は殺すのをやめて、舍衛城へ凱旋した。斯くて迦毘羅城は全滅されたのである。

戰爭が果てゝ瑠璃太子が大軍を以て舍衛城へ凱旋した時、城內より絃歌の聲が聞える。瑠璃太子は「歌つてゐるのは誰か」と聞くと、それは祇陀太子である。祇陀太子といふ人は、瑠璃太子の異腹の兄で祇園の土地の持主で、樹木全體を敎團へ捧げた釋尊の歸依者である。

彼は恐く今度の事に對して飽迄反對をしたに相違ないが勢力がないので止めることが出來なかつたのであらう。瑠璃太子は自分が征路から凱旋するのに、城中で酒宴を張り、歌ふたり舞ふたりして居るとは不都合であるとの故を以つて、祇陀太子を殺して仕舞うた。此悲劇は王舍城の悲劇と一對である。波斯匿王は出奔して死に、末利夫人も生死不明となり、簒奪者の瑠璃太子も釋尊の豫言の如く、奇禍に觸れて僅の中に非業の最後を遂げた。さて此戰爭が始まる前に釋尊は迦毘羅城を訪れ尼拘類園に（尼

拘類園といふのは東京で云へば日比谷公園のやうに宮城に近い公園である）住せられた。

佛の容顏輝きなし

(四)「時に佛の尊顏姿容燿きなく、頂光明なく、衣服の色は變つた。」

此の三つの變化があつた。佛の御顏、御姿に耀きがなく色は蒼ざめ萎れて居られる。頂きには常に尊い光があつたけれども今日は亡くなつてゐる。お召しになつて居られるお衣の色も變つて何となく悄然としてをられた。

「佛阿難に告げて曰く却後七日、迦毘羅衛の釋氏貴性、皆當に傷き斃るべし」『大無量壽經』を說かれる際は光顏巍々として威神極りなく『華嚴經』をお說きになる時には海印三昧にお入りになりて相好高遠であらせられた。今や容顏光を失つて色は蒼白、如何にも悄然しておいでになる今迄斯ういふお姿は見た事がありません」と斯う怪んで問ふた時に、釋尊は「これから七日經てば迦毘羅は塵に遇ふであらう。それを私は心配に思ふてこんなにしてゐるのだ」。それから色々比丘達が「どういふ譯で一體斯ういふやうな恐ろしい事になつたのでありませうか」と舍衛城の悲劇の因緣を問ふた時に釋尊が云はれた。

過去世、飢饉の時に、米一升金一升の時があつた。迦毘羅城の人は困つて古池の魚を捕へた、拘璵、兩舌の二匹の魚がいふには「俺等は水性の虫人に害はない、然るに人民來つて俺等を食ふ」と魚は怒つた。其の次の言葉が一寸わかり難い「設し前世の時、少しく福德ある者、其れを當に用て怨を報ずべし」前世に於いて福德の少い者、少しく福德ある者、さういふ者に怨を報じやうではないかといひ合うた。八才の小兒陸にある魚の死ぬるのを見て笑ふたので「こいつに怨を報じやう」斯ういふ考へを起した。前世の時に少しく福德ある者とはどういふ意味であらうか、今は臆測する外はない。ちよつと福德があつて手を捕つて殺さぬ、けれども、福德が少いから徹底的に救濟もせぬ。併し福德があるから殺される時には可愛い思ひは起す。つまり慘忍酷薄

の獣物のやうな物には、飛びつく事はないが、氣の毒なと思うても助けもしない。幾分の同情を以てゐる。かういふ者に怨みを報ゐるやうといふ意味であらう。

とまれ少さな八つの子供が、陸にあつて魚の死んだのを見て笑ふた。「拘璃は即ち瑠璃太子、兩舌は即ち好苦梵志、八才の兒は我釋尊御自身であつた。斯ういふ前世の因縁があつて自分は苦んで居る。(六)「我其の時に坐して見て而も之を笑ふ、今頭痛を患ふ。猶し石を以つて壓するが如く、頭を以つて須彌山を戴くに似たり。」と仰せられた。

粗雑なる經典記者を通じて釋尊が如何に苦まれたかといふ事は十分見る事が出來る。こゝの因縁の如きも、前世の業によつて斯ういふ一つの苦しい果報を受ける。前世に何ぞ業があつたなら、之は何でも現世に苦みを受けるのである。それだから、今、頭痛がする、石を以て打たれるやうでである、須彌山を戴くやうである。「須彌山は神秘的な大きな山で全世界を皆んなよせても及ばないやうな非常に大きな山である」百千のヒマラヤ山を戴せるやうな苦みだ。苦痛の最高を經驗されたのである。

茲に於いて我々は正しく救濟教主としての釋尊の偉を正しく見ることが出來る。肉をもてる世尊、現世の血縁の苦みを脱し得ぬ聖者を拜することが出來る。かうした聖者なればこそ、韋提希夫人の如き愛情の破綻から苦痛のドン底へ落ち込んだ一女性を憐んで、人類救濟のみ教へを説き給ふたことである。

而も哀んで破らず、釋尊は戰爭後、舍衛城を出で迦毘羅城に向はれて、釋種の女達を教誨せられた。

(五)爾の時に世尊は城の東門に詣り給ふ。城中煙火洞然たるを見る。

城は今炎々として燃え上り慘憺たる光景であつた。其の時に偈をお説きになつた。

一切行無常　生者必有レ死　不生則不死　此滅爲二最樂一

と尼拘類園にお出でになつて人々に説法された。

悲痛の忍受、宗教的創造

釋尊は今や洞然と燃えてゐる故郷の城、慘殺された同胞の堆高き死骸、悲痛の場面を背景として、戰の後の弔ひに、一切の行は無常であるといふ偉大なる說法をなされた。私はこゝに本當に、まことの人としての歩音を聞きうると思ふ。いかに道を體得せる人も、決して苦痛がない譯でない。人生の苦は苦と受ける。病氣にもなれば苦しい苦は苦として受ける。信仰のある人も、不幸や災難の苦がある。苦みがあつても、哀んで破らず、哀みの中にありながら却つて悲みを因として、そこに大きな宗教的創造がなし遂げられる。こゝに不可思議の力が加はらせられるのである。迦毘羅城は滅ぼされ人民は慘殺された。そして釋尊の苦痛は絶頂に達した。しかも全法界をあげて押し寄する苦みを逃避せられず、よく夫を忍受して爲すべきことを爲し給ふ。何んといふ莊嚴。何んといふ偉大であらうか。私はこゝに救濟教主としての釋尊の眞面目を心ゆくばかりに味はせて頂くことである。

私は釋尊の研究に於てこの『增一阿含經』に出て居る世尊の苦痛忍受に驚いたのである。これこそ眞の聖者の態度であると知つて言ふべからざる力を感じたことである。夫迄私は何んとなく信仰といふものは塵世を超越した心境に住することゝ決め込んだ。然るに此釋尊の態度に接して自分にどういふ人生の波が押し寄せて來ても、堂々對面して責任を避けず面を振らず其の恐ろしき運命の波に向つてとび込んで、其れを材料の炭として其處に信仰の火を燃やすのであると知るやうになつた。家庭の中にあつては家庭の上に信仰上の考へを以て其處に進んで行く、社會の爲に働かなければならぬ場合があつたならば、苦しくとも社會の爲に大いに働く。人を助ける場合があれば奮發して人を助ける。人の罵りと讒謗を受たならば平然としてそれを忍受する。そして苦痛は矢張り苦痛である。苦痛を苦痛としないことが所詮でない、人間生きて居る間は必らず苦痛が伴ふ、宗教に入つても苦痛のない人間はない。此の苦痛をなくすれば趣きがない餘り多くの苦痛を持つて居つて精神をこはす場合があるならば、自己の能力で忍べる丈に緩和すればよい。負へる丈の苦痛は之を負うて、それを事緣と

して生活を味ふのである。他人が自分に對して惡を行つた、譬へば中傷したとする、憎いには違いないそして亦結果として種々の苦痛も伴ふこともある。併しその苦痛を帶びながら信の上から心の中で敵を許すことが出來る。然るに先方が中傷したからこつちもやり返すといつては限りがない。火を以て火を消やす事は出來ない。自分の心を荒す丈である。

提婆の反抗の當時釋尊或る時に鉢を持つて行乞された。アト提婆の姿が見えた。釋尊は阿難に向つて「提婆が居るから外の道を行かう」阿難は「提婆が居るので恐れ給ふか」「提婆を恐れるのではない。あゝいふ者と一所にあるは宜しくない」惡人を許しながら而も惡人を避けられた。是に依つて私は始めて聖者の面目を知る事が出來ると思ふ。

斯ういふやうに釋尊は故郷の全滅の場には全世界を集めても及ばないといふ其の偉大なる須彌山を戴く程の苦痛を忍受せられた。其の苦痛を忍んで受けられるといふ釋尊なればこそ、あの恐ろしい悲劇のドン底に沈んで居る韋提に人類救濟の福音を說かれたのである。韋提は心の奥底から釋尊の說敎を聞いて喜びに滿ちた人となつた。此のやうな宗敎的人格を通じてこそ初めて眞の信仰が生れうると思ふ。即ち度々いふ如く現實といふものを決して壞さない。逃げないのである。現實の中に沒頭して居つて其の中に光を現して行くのである。

註

（一）末利夫人曰く
幸勿二愁憒一可共俱逝還二我父國一卽進發七日七夜到二迦維羅衛兜薩聚一——（佛說琉璃王經）——

（二）欲二使空爲地一　復使二地爲一レ空　本緣之所レ繫　此緣不二腐敗一——（增阿第二十六）——

（三）親族之陰涼　釋種出二於佛一　盡是我枝葉　故坐二斯樹下一——（瑠璃王經）——

（四）尼拘類園に
「時佛尊顏委容無レ耀頂無二光明一衣服變色」阿難此三變を見ると怪しみ問ひ奉る
「佛告阿難却後七日迦維羅衛釋氏貴性　皆當二傷斃一現二斯變一者爲二家中一持レ服故也」

（五）爾時世尊諦二城東門一見城中煙火洞然卽時而說此偈一

一切行無常　生者必有死　不生則不死　此滅爲最樂

——增阿第二十六——

（六）我爾時坐見而笑レ之　今患二頭痛一　如レ似二石壓一　猶如二以レ頭戴二須彌山一

——增阿第二十六——

救濟教主世尊終

釋尊と其弟子達
（下卷）

昭和四年七月五日　印刷
昭和四年七月廿壹日　發行

〔定價壹圓五拾錢〕

著作者　山邊習學
發行者　神田豐穗　東京市麹町區內山下町一丁目一番地
印刷者　關根慶寬
印刷所　早稻田印刷株式會社　東京市牛込區早稻田鶴巻町三六二

發行所　株式會社　春秋社　東京市麹町區內山下町一丁目一番地
振替東京二四八六一番
電話銀座(57)五六五二番
五六五三番